社會黨鎮壓法の施行せられたのは一八七八年十一月二十一日であるが、此前後に於ける社會黨員の得た所の投票數並びに選出せられた社會黨議員數は次の如くである。

一八七一年に於ては社會黨議員に對する投票數十一萬八千票で、選出議員數は二人であつた。

一八七四年には三十五萬二千票で、議員數は九人である。

一八七七年即ち社會黨鎮壓法發布の前年に於ては四十九萬三千票に殖え、議員數は十二人となつた。

然るに社會黨鎮壓法の出た一八七八年には四十七萬三千票で、議員數は三人を減じて九人となつた。

三年の後の一八八一年には投票數三十一萬二千票で、選出議員は十二人となつた。

一八八四年には投票數五十五萬票、選出議員數は倍となつて二十四人となつたのである。

而して一八八七年に於ては投票數七十六萬三千票に殖え、一八九〇年に至つては百四十二萬七千票に殖えて議員數は三十五人となつた。

即ちビスマークの社會黨鎮壓策は少しも社會黨を鎮壓するに至らずして、却つて其勢力を著るしく增したのである。是は如何なる取締も、如何なる壓迫も無効であると云ふ事を最も有力に證據立つるものである。何となれば此間に於て獨逸は愈々益々資本的侵略國たるの實を充實したのであつて、此期間が最も旺盛に資本的侵略主義の活動時代であつた。此事實がある以上は如何なる取締も、如何なる壓迫も社會民主運動の大いに起ることを妨ぐことの出來ないと云ふことは、之を以て明かである。我が日本に於て社會民主運動を鎮壓せんと欲するならば、資本的侵略主義を執る事を止めるのが最も有効なる方法である。之と反對に資本的侵略主義を取る以上は如何なる壓迫も如何なる取締も到底無効であると覺悟すべきである。是は議論でも何でもない、疑ふべからざる事實である。

九

そこで日本は進んで英吉利のやうに、又之に眞似した獨逸のやうに、資本的侵略國となることは到底不可能である以上は、他方に於て日本は獨逸流の、又英米に今後盛んにならんとする社會民主々義が危險性を帶ぶ可き虞は全くないのである。世界の大勢は此二つの主義の支配の下に立つ事になつても、日本は其間に處して獨特の地位を有つて居ると言はなければならぬ。此の點に於ては我輩が今考へて居る所では、佛蘭西も略ぼ日本と同じやうな立場にあるものと思ふ。其事に就ては（前段收錄の諸文を見よ）兎に角日本は此間に處して獨特の使命を有して居ると我輩は確信する。吉野博士と合議の結果、我が國に起るべき所の黎明運動の第一の項目としては、日本の國本を學理的に闡明し、世界人文發達の上に於ける日本の使命を發揮することたる可しとしたが、我輩の考へるところの日本の使命と云ふのは茲から立論するのである。日本の國本は斷じて侵略的でない、又資本的侵略的でないことは過去に於てさうであつた。而して之を學理的に闡明すると云ふことは、日本をして斷じて資本的侵略國たらしめず、また武斷的侵略國たらしめずと云ふことが第一の點であると思ふ。此の國本に基づいて日本の使命を發揮すると云ふは、一方は資本的侵略主義に對抗し、他方社會民主々義に對抗して日本は日本としての獨特の文化史的使命を負ふて居る。之を世界に發揮し、世界列國をして資本的侵略國でもなければ、又社會民主々義でもない一の有力文明あるを知らしめ、この二つの主義から來る弊害を防遏し、進んで自己の獨特の地位を世界に普く知らしめて、人文の發展に貢獻すると云ふこと、是れが我輩の出立點である。

十

而して此の特別の使命を以て戰後の世界に新たに生ずる趨勢に處して、我國としては第一義として國民生活の安固と其の充實とを大本とせなければならぬものと考へる。我輩は社會政策の標的は、國民生存權の確立にあると豫てから主張して居るものである。之に就ては世上必ず異論があることゝ考へる。併し如何に考へても少なくとも國民生活

の安固と充實とは、國の存在する上に於て最も重要なる任務の一つであることは誰人も疑ひを容れない所と信ずる。然るに今世界には一方愈々益々資本的侵略國たらんとする英米があり、他方には社會民主國たらんとする露獨其他の國があるとすれば、之から來る所の國民生活の動搖なるものはどうしても免れ得ないことである。此間に處するには、日本は對外經濟政策、又對內經濟政策の上に非侵略主義を一貫して、國富の充實を圖らなければならぬ。我日本に於ても資本的侵略主義を執れば、無論國富は充實するだらうけれども、其爲めに甚だ高い價を拂ふことを覺悟せねばならぬ。拂ふ價の中最も高い價は社會民主々義が旺盛となる事是れである。

次には資本的侵略主義は國民生活を壓迫し蹂躙することは過去の經驗に照せば明かなる事である。休戰條約の成立した爲めに我國に於ける成金中、續々倒るゝ者が出來、外國から輸入が可能となつたために鐵成金が倒れるとか、染料成金が倒れると云ふに對して、所謂識者と稱せらるゝもの〻中、斯くの如くんば財界に大恐慌を生ずるが故に、日本も宜く西洋諸國に倣つて輸入の制限若くは輸入の禁止を斷行して、財界の動搖を防がねばならぬと主張することは、是れ即ち資本的侵略主義の上に立つたところの主張であつて、國民生活を犧牲に供して資本閥の利益を擁護しようと云ふのである。戰時中不當なる高い價を貪り、不當に莫大なる利益を得て居つたところの人々が休戰の成立と共に外國から若干の輸入がある爲めに、最早從前のやうに不當利得を占むることが出來なくなつたとて、之を擁護する爲め依然として高い價を維持せしむべく、國民生活に必要なる輸入品を制限すると云ふことは國民生活を犧牲に供して、資本閥財閥の利益を擁護することである。

十一

日本は資本的侵略國たらずと云ふ國本を確立すれば、斯くの如き要求は頭から之を斥けなければならぬ。國民生活の安固充實と云ふことが第一の仕事である。產業の振興と云ひ經濟的發達と云ふも、畢竟するに國民生活の安固充實の爲め之を必要とするに外

ならぬ。然るに國民生活を壓迫してまでも一部產業の利益を擁護すると云ふは冠履顚倒の論で、其點からいへば之れこそ危險思想である。今後此の種の誤れる議論は更に聲高く叫ばれるに相違なく、我國の政治に可なり有力に影響することゝ思ふ。吾々は國民生活の安固充實と云ふことを高く標榜して此の種の誤りたる思想と對抗して之と戰はねばならぬと信じて居るのである。獨逸は此の思想に餘り深入りして遂に今日の悲慘なる狀態に至つたのである。唯獨逸帝國の國力を擴張し、唯だ獨逸の經濟的征服を全からしむると云ふことの爲めに、極端なる保護政策を行つて、是れが爲に國民生活の安固を害し、之に非常なる壓迫を加へつゝあつたのである。無理に無理を重ねて今日迄押進んで來たが、今日は是れが一朝にしてがらり崩れて了つたのである。無理と云ふものは決して永續するものでないことは、獨逸の例が最も克く之を示して居る。我輩は決して英吉利流の自由貿易主義を日本に其の儘採れと主張するものでない。或點まで保護政策の必要なるは認める。然しながら其の保護政策は決して資本的侵略主義の機關としての保護政策であつてはならぬ。然るに學者の議論は如何にも鋭しやかに、表面の理由は甚だ合理的なるかのやうに見えて居るけれども、獨逸の保護政策なるものも實を云へば國民生活の安固充實と云ふことを出發點とした保護政策でなく、世界の表に於いて大なる資本的侵略國たらん爲の手段としての保護政策であつた。ビスマークは元來は自由貿易主義者であつたが、一八七九年に俄然保護政策主義者に豹變したと云ふのは、彼の立場から云へば英吉利に對抗して獨逸の國權を擴張するには、どうしても資本的侵略主義を執らねばならぬ。其には最も有力なる手段として保護政策に着眼したのである。無論是れは獨逸帝國を築き上げた事に有力なものであつたことは疑ふべからざる事であるが。それは第一の原因ではなかつた。而してビスマーク去つて後も獨逸は其の保護政策なるものを益々進めて行つたのは、資本的侵略主義が益々之を擁護したからである。社會民主々義は此保護政策に對する最も猛烈なる反對者であることは當然である。のみならず獨逸の識者學者の中にも資本的侵略主義を非として、獨逸をして經濟的に世界を征服せしむるは到

底不可能なることを覺つてをつた學者は、極力保護政策に反對し、寧ろ英吉利と同じ自由貿易主義國たらしめんと主張する者もあつた。我輩の師匠たるプレンタノ先生は、即ち獨逸に於る自由貿易論者の最高權威であつて、先生は獨逸をして英吉利に對抗する資本的侵略國たらしめんとすることは甚だ危險なりと云ふ點から着眼せられたものと信じて居る。此點に就ては我輩は師匠の說を悉く遵奉して、今日に至つても變へないものである。然しながら資本的侵略國でない國に於ても、保護政策は可能である、又必要であると我輩は信じて居る。殊に日本の如く世界の經濟的發達に著るしく後れた國に於ては唯全然自由放任するは決して宜しくない、所謂敎育的保護政策なるものを執ることが必要である。而しながらそれも成るべく關稅政策に由らないことが必要である。關稅政策に由るとなれば、資本的侵略戰を行はないまでも、所謂關稅戰爭なるものを犯すことは免れない。關稅戰爭を起すとなると、不知不識の中に資本的侵略戰を加味することになる危險がある。是れは今後の日本に於て大いに警めねばならぬ點と信ずる。

十二

獨逸に於ては其保護政策が國民生活の安固を害したことは實に非常なものである。此點に於いては帝國は倒れ、カイゼルは退けられ、獨逸が社會民主國となつたことは、一面に於いて大いなる幸福を獨逸國民の上に齎したものと云ふ可きである。社會民主々義を徹底的に執つて進んで行くものとすれば、過去に於いて行つた極端なる保護政策は全く捨てゝ了ふことゝなる。社會民主々義國となりながら、過去帝國時代の極端なる保護政策を行ふと云ふことは大なる矛盾であつて、論理の上に於いて少しも之を是認すべき理由はないのみならず、實際上に於いて甚だしい不都合を來すことである。如何に獨逸の社會民主々義者が妥協的態度を執るにしても、此點に於ては斷然として彼等四十年來の主張を貫徹することゝ我輩は觀察して居る。然れば少くとも保護政策の爲めに被つたところの、國民生活上の壓迫は著るしく輕減せらるゝことゝなつて、此點に於て獨逸國民は甚だ幸福な國民となることゝ信ずる。帝國成立の初めから斯くの如き愚なることを

行はずに國民生活を安固に進めて行つたならば、獨逸國民は更らに多く幸福であつたらう。過去四十年間無駄なる努力をし無駄なる壓迫を被り、無駄なる不便を忍んで來たことは實に獨逸國民の爲めに氣の毒千萬であると考へる。我が國に於て斯くの如き愚なる經驗を繰返すべからざることは多言を要しない。

十三

資本的侵略國にあつては國内に於る資本的侵略主義の機關として、資本家の利益を常に第一位に置いて、凡ての經濟財政的施設をなすことを免れない、是亦獨逸の經驗が能く示すところである。我が國に就て言へば、戰時中兌換券が非常に膨脹したことは色々の原因はあるが、其の有力なる一原因は資本家の利益を擁護すること是であつた。であるから物價騰貴の最大原因は通貨の膨脹である。通貨收縮せざれば物價騰貴の勢を防ぐことは出來ず、從つて國民生活の不安は取除くことは出來ないと云ふ主張に最も熱心に反對する者は資本閥の代辯者である。又資本閥の擁護をせねばならぬ運命を有つて居るところの政黨者流や輸出業者は、熱心に通貨の收縮に反對する、是れは我田引水論に外ならない。經濟上の問題に對しては常に斯くの如く特殊の利益が背景をなすを免れぬ。從つて眞に公平なる、眞に國民全體の幸福を出發點とした議論が行はれぬ例は幾らもある。通貨膨脹可否の論戰は端的に其一例である。通貨の膨脹を可なりと主張する論者の中には、決して公平なる立場から主張するのでなくして、彼等の特殊利益の上から立論する者が幾らもある。故に是等を一々對手として其の誤謬を指摘せんとするも、緣なき衆生は到底度し難いのである。學者の議論と云ふとも其の學者が眞誠に唯だ學術の研究のみの立場から立論するならば、如何に間違があつても是れは人間に免るべからざる事である、之を訂正して行けは宜い。之に反し、學術の研究のみから出發せずして、學者であつて同時に政黨屋であるとか、成金の番頭手代であるとか云ふ人の議論は、決して學者の議論として聽くべきでない。我輩の信ずる所に依れば、特殊利益に關係ある疑ひある者は、その特殊利益に關係ある問題に就ては寧ろ口を噤んで居るべきで

ある。例へば當局者が通貨膨脹を是認し之を以て必ずしも物價騰貴の原因にあらずとして居るとき、此の內閣を支持する政黨に籍を置く學者が、通貨收縮の不可、又は通貨の膨脹は物價騰貴の原因にあらずと主張するは、之を政黨者の偏した論としては聞くべきも、公平なる眞理のみを生命とする學者の議論としては聽くべきでない。況んや政府の官吏であつて、而も當面の責任者たる者が、學者顏して議論を試み、人をして學理論と思はせるのは甚だ不都合である。然るに我が國に於ては斯ういふ事を知らないで、何々博士、何々學者と言へば其人が或る特殊の境界にある人なるにも拘はらず、之を學者の議論と考へ一樣に公平なるものと認めるの弊がある、彼等が眞に學問上公平なる議論をするものならば、其の特殊利益との關係を全然斷絕するか、然らざれば、俺は我田引水論を稱ふる者である、俺は特殊利益の代辯者であると云ふ事を初めから明言して議論するならば宜しいが、さもなければ可けない。無論今日の社會は特殊利益を有つて居る者は其利益を主張するに差支はない、唯之を公平客觀の假面を被つて爲すは斷じて斥けねばならぬ。

資本的侵略國でなければ是等から來る所の弊害は幾らでも之を防ぐことは出來るのである。日本が資本的侵略國になるとすると、斯くの如き特殊の利益は益々強くなつて來て、是をジャスティフイする議論が益々多數になつて來る。其の結果或は國民生活の安固を害し、或は國運の發展を妨ぐることになる。

十四

黎明運動の一個條として、吾々は世界の大勢に逆行する危險なる頑迷思想の撲滅を圖らねばならぬと思ふ。是は當面の問題としては最も重きを置くところである。少しく之に就て開陳して見よう。

日本をして資本的侵略國たらしめず、又社會民主國たらしめず、日本獨特の使命を世界文明の上に發揮せしむるに於て大いに有害なるは、頑迷なる反動思想、保守思想之である。

而して吾々は思想は思想を以てのみ戰ふべく、言論は言論を以てのみ對抗すべしと信ずるものである。政府の取締を以て、政治家の政策に依つて、思想言論を抑壓することは國を危うからしむる所以である、と確信して居るものである。故に吾々は何處までも言論を以て言論に對抗し、思想を以て思想に對抗せんと欲するものであつて、而して先づ最も對抗せんと欲する者は、以上言ふところの頑迷なる保守思想之である。然しながら吾々は何處までもフェーア・プレーの立場に立つものであるが故に、如何なる頑迷思想家と雖も決して國權を以て之を取締ることを要求しない。否、斯くの如き事に對しては、吾々は吾々の敵に對しても何處までも擁護者の地位に立たねばならぬと信ずるのである。保守主義を抱いて居る人は何處までも保守主義を主張し、頑迷思想を有つて居る者は何處までも頑迷思想を鼓吹するが宜しい。然らば吾々は愈々益々盛んに之より、より有力な進歩思想を以て、黎明運動を以て之に打勝つて、遂には思想の戰ひの上に於て、言論の戰ひの上に於て、吾々の敵がその非なることを悟つて、獨逸の如く無條件降伏をなすに至るまで、吾々は吾々の努力を止めない、又吾々の努力は必ず勝利を占めることゝ確信して居るものである。

十五

亞米利加は自由主義の國と云はれて居るけれども、近來ディスローヤルティー征伐に就て甚だ不都合な事を行つた。政府が之を取締ることの峻烈なるは勿論、現今に於ても言論を以て言論に對抗し、思想を以て思想に對抗するに止まらないで、所謂リンチ（私刑）的の運動を以て之に對抗する。例へば亞米利加に於て發行する獨逸語の新聞を悉く禁止しろとか、獨逸語の書物は悉く之を沒收して了へとか主張したり、又少しにても獨逸の長所美點を擧ぐるものがあれば、啻に言論を以て之に對抗するのでなくして、其人に個人的に强迫、威壓、制裁を加へ、或はその家族を苦しめると云ふことを人民が相互にやつて居るのである。甚しきに至つては彼はディスローヤルティーの規定を犯した者であると稱して、群衆が寄つて群つて其人を縛り殺したり、亂打して遂に死に至らしめ

た例が若干ある。而も之れが市俄古などの如き大都會に於て、白晝堂々と行はるゝと云ふに至つては實に驚くべき野蠻である。我輩が英米に於て常に其の口に稱ふる正義なるものは、決して十分に實際に行はれて居るものでないと極力唱ふるは、斯くの如き事實を頻繁に耳にするからであつて、是を疑ふ者があるならば最近三四ヶ月の亞米利加の新聞を取寄せて見れば幾らも其の例は擧つて居るのである。斯くの如きは斷じて我國に於ては許すべきではない。保守主義の人がリンチを行ふもいけないが、黎明運動に從事せんと欲する者も亦その反對思想家に對して、議論以外の手段に愬へて何事かをすると云ふことは斷じて不可なりとするものである。是れ即ち吾々言論を以て生命として居る者が蹶起しなければならぬと信ずるに至つた所以である。

十六

吾々は元來一讀書生に過ぎないものであるが故に、實際運動に從事するが如きことは決して好ひところでない。故に吾々が運動と稱するも、言論以外の運動をするものでない。筆に口に、與へられた心けの力を以て頑迷思想と戰はんと欲する、その爲めに吾々が自ら起つたのである。吾々が起たざれば或は官憲の壓迫とか、或は法律の制裁とか云ふことを以て、是等を取締り又壓迫することが起つて來るかも知れぬ。吾々は吾々の敵とする頑迷思想に對しても、斯くの如きことは斷じて斥けんと欲するものである。故に斯くの如き不祥事の起らざらん爲めに、又リンチ的行動の起る事を防ぐために、公明正大の立場に立つて言論戰を開始せんと期するものである。資本的侵略主義を執る國に於ては、資本閥を擁護する爲めには言論を壓迫する必要が常にあつた、即ち前に擧げた所のビスマークの社會黨鎮壓の如きはその最も顯著なる例であるが、是程極端なる手段を執らぬとしても何時もこの種の手段を絶えず執つてゐたのである。吾々は之に倣はざらんことに努めねばならぬ。

十七

何故に吾々は保守思想の打破を期するかと云ふと、是は最も國を危うからしむるもの

であると信ずるからである。言論に打勝ち得るものは言論のみ、思想に打克ち得るものは思想のみ、其他の手段では一時の成功を收めることは出來ても、決して結局の勝利を期すべきでない。ビスマークの社會黨鎮壓の成績で知るべきである。否、獨逸帝國過去四十年の歷史の全部を擧げて其の有力なる證據である。資本侵略思想も社會民主思想も之を斥けんとするならば、我國の獨特の國本に立脚して、其の使命を發揮せしむると云ふ思想の上から、進んで進步的思想を鼓吹することが第一の急務である。然しながら如何に吾々が言論戰に努力しても日本にして若し資本的侵略國となるならば、社會民主思想の起つて來ることは之を防ぐことは出來ない。否、眞に危險なる思想が着々として起つて來ることをどうしても防ぐことは出來ない、即ち吾々の言論戰に從事することは、半ば以上その意味を失つて了ふと思ふ。此點に於て英吉利や亞米利加は實に氣の毒な立場に立つて居ると思ふ。英吉利と亞米利加とは世界中自分の赴くところ敵なく、世界を思ふが儘に資本的に征服し、經濟的に横行することが出來ると、斯う思へば幸福な立場に立つて居るやうであるけれども、是は國內に於てその反對毒たる社會民主々義、否、眞に危險なる思想（I・W・Wの如きを云ふ）が起つて來て、矢張り時期の長短あるのみの違ひで、最後には獨逸の陷つた運命と同じやうな運命に陷ることは免かれないかも知れない。即ち一時の幸福は却つて將來の大不幸の源となるだらうと考へるのである。然し英吉利、亞米利加に於てその資本的侵略主義の非なることを知る者のないと云ふことは決してない。英吉利でも亞米利加でも眞に正義人道を念とする人は尠からずあり、又經濟上健全なる思想を有つて居る人も多數にある。彼等にして國論を左右し得るに至るならば、英吉利が十九世紀に於て盛んに執つて來た、資本的侵略主義を捨つることになるかも知れないし、又亞米利加は是より進んだ資本的侵略國となることを止め、殊に有色人種に對して極端なる差別的待遇をすると云ふやうなことがなくなるかも知れない。否、吾々は實にそれを希望するものである（亞米利加の日本人排斥は人種的憎しみも一大原因に相違ないが、具體的に云へば經濟的原因が甚だ大である）。乍去亞米利加が愈々益

〻資本的侵略國となるとすれば所謂、カラー・ディスクリミネーション（有色人種排斥）は益〻強烈に行はれるものと思ふ。

十八

然し如何にカラー・ディスクリミネーション廢止を要求しても亞米利加が資本的侵略國たるの國是を立てる以上は、この要求は事實に於て容れられないと我輩は信ずる。是は英吉利になくして亞米利加にのみある問題である。即ち亞米利加特殊の經濟事情から起つて來る處の一つの現象である。資本的侵略主義と云ふものは、其時と場合とに於て種〻なる問題を生じて來る、將來また他の新らしい問題が生じて來るに相違ない。而して是等問題の中には日本が不當なる壓迫を被むる結果を惹起すことが必ずあること、思ふ。所謂暴に酬ゆるに暴を以てし、日本も亦資本的侵略國となつて之に對抗して行くことなると、斯くの如き紛爭は愈〻繁くなる。乃ち先づ英吉利が其資本的侵略主義を捨てることが最も希はしい事である。然し彼等をして之を捨てしむる場合に日本が資本的侵略國になつて了つては何にもならない。資本的侵略主義を取れば社會民主々義の隆盛となるは免れない。處が資本的侵略國ならざる日本に於ては、社會民主々義は決して何等危險性を帶んで居ないものである。學者の研究題目として或は一部有識者の思索問題として、彌々熱心に研究せらるゝであらうし、又之を遵奉する人もあらうから其數は殖えるであらう。然し之は日本に取つて何等の危險を生じないものと我輩は信じてゐる。但し繰返して云ふ、それは日本が資本的侵略國とならないと云ふ前提の下に於てゞある。然らずして侵略國となれば社會民主々義が或種の危險を意味すること是れまた疑ひを容れない。何故危險を意味するかと云ふと、社會民主々義の運動はその資本的侵略主義を倒す爲めの反對毒として起り、其間に抗爭（即ち階級戰爭）が起る。その抗爭が取りも直さず國に取つて危險を意味するのである。我輩は階級戰爭を極力排斥するものである。

十九

獨逸の如き資本侵略主義を益〻充實して其の文明が著るしく資本侵略的となり、その

學問も哲學も、否、その文學までも稍々その色彩を帶んで來て居つた。是が一朝覆へされると云ふことは、即ち危險を意味するものである。此意味に於て獨逸の學問は今破產期に際して居ると云ふ可きである。殊に經濟學の如きは社會民主々義の最も當面の敵であつて、獨逸の國立大學に於ては敎授と云ふ敎授、講義と云ふ講義は少くとも經濟學の範圍に於ては社會民主々義の批評、否、その打破に努めて居つたのである。然るに一朝にして獨逸が社會民主國になつた今日に於てはその大學敎授等は去就に迷ふであらう。彼等は進んで從來主張した學說を全然破棄すれば、それは社會民主々義に合することも出來るであらうけれども、是は學者として容易に出來ないことである。然らば退いて何處までも從來の學說を守つて社會民主々義と戰はんとするか、今度は彼等の方が危險思想家と云はれるであらう、現存社會の敵と看做さるゝであらう。社會民主々義國に於ける大學敎授が、社會民主々義に猛烈に熱心に反對する時は、社會民主國の立場から云へば一の危險思想である。即ち順逆其所を異にすることになる。此意味に於て獨逸の經濟學は今日破產期に際して居るわけで、是は誠に面白い見物であると思ふ。我國に於ても獨逸の學問許りで頭を固めて居た人々は獨逸に革命が成就する可能性を今でも疑つて居る。過去數十年かゝつて出來上つた獨逸帝國の統一は、革命などに依つて破れるものでないなどゝ唱へて、現に自己の頭が破產して居るのも知らないで居る。他から見ると洵に氣の毒千萬なことである。

二十

我國が資本的侵略國たらざる限りは、社會民主思想が多數の人に依つて遵奉せらるゝやうになるとしても何等の危險思想を帶んで居らない。遠き將來はいざ知らず、近き將來に於て我國は資本的侵略國たらざる限りはと云ふ前提の下に於て社會民主々義は決して有力なる思想となることはないと信ずる、唯だ一部の思想家の間にのみ限らるゝであらうと思ふ。而して我々は社會民主々義の誤つて居る點を飽くまで言論を以て指摘すれば十分である。縱んば社會民主々義が日本に於て危險性を帶ぶるやうになつたとしても

（それは到底あり得ない事と信ずる）、その危險に打克つものは唯だ言論思想あるのみ、殊に社會民主々義なるものは一つの學說で、學理から出立して居り、その根柢は學問研究の上にあつて、決して單なる感情論、單なる空想ではないのである。單なる空想であれば或は權力の壓迫で雲散霧消して了ふかも知れない、反之學問上に立脚して居る以上は、左樣なる恫喝では決して消滅するものでない、學問に對抗するには學理の外はないのである。社會民主々義思想が危險性を帶んで居るとしても、之は自由なる學問研究に基く言論に依つてのみ打克ち得べきのみ、その外のものが之に對抗しても何等の力もない。然るに世界の大勢に逆行する頑迷思想を以て之に對抗すれば必ず敗けるに相違ない。何等學理に根據を有しないで、唯だ感情の上から唯だ空想に基く保守的頑迷思想を、幾ら鼓吹して見たところで、社會民主思想若しくは之と同樣の思想に打克つことは出來ない。却つて見苦しき敗北を招き、必ず返り討になるに決まつて居る。

二十一

話は少し違ふけれども、例へば國體擁護などゝ云ふことを唱ふる人があつて、進歩思想を抱いて居る人に對して戰ひを挑んで演說などをしても、其結果は却つて進歩思想の廣告をするに終つて了ふた如きものである。なまじ生仲手を付けて居らねば、頑迷思想は頑迷思想として存在して居られるかも知れないが、之を以て進歩思想に對抗するとすれば打敗かされるに決まつて居る。是は無論社會民主思想とは場合が違ふけれども、思想は思想を以てのみ對抗すべく、言論は言論と對抗す可く、何等合理的根據なき議論は何にもならない一例である。是れ吾々が日本國本の合理的闡明を第一に標榜する所以である。言論思想の力强いと云ふのはそれは合理の上の力であつて、合理的ならざる思想言論は何等の力もないものである。危險思想と云ふことを頻りに言ふけれども、眞に危險思想と見做すべきものは我國に於ては一つもないと吾々は信じて居る。我國本は左樣な脆弱なものではない。强いて危險思想を擧げるとならば、即ち前に言つた資本的侵略主義を鼓吹する思想即ちこれこそ危險思想である。反對に社會民主々義は資本的侵略主義

が行はれて居らない限りに於ては毫も之を危險思想と認む可きものではない。尤も資本的侵略主義には若干の學理的根據はある。所謂保護政策論と稱するものゝ中に、其の若干が包まれて居る。其事は今は省いて置く。

二十二

吾々は此種の危險思想に對して何處までも學理の上に打立てた所の合理的言論を以てその危險に對抗すべきである、是が唯一の途である。然るに國體擁護とか或は思想の統一とか云つて、名前は甚だ尤もらしく聞えるけれども、其實に於て何等合理的基礎を有して居らない主張が行はるゝとしたならば、之こそ却つて危險性を帶びて居るものと言はなければならぬ。此はそれ自らに於て危險を包藏して居るのみならず、他の危險思想を挑發する所以である。他の危險思想と云ふのは、例へば無政府主義の如きを言ふのである。

無政府主義には多少學理的思想の入つて居ることは否定し得ないけれども、之を社會民主々義に比ぶれば雲泥の相違がある。夫を全然同一とし、此兩者を同種の物と認めるは大なる誤りである。頑迷思想が跋扈すれば、却つて此種の無政府思想が起らないとも限らない。但し我國に就ては、我輩の確信するところに依れば、如何なる場合に遭遇しても無政府主義などが力となることは斷じてないものと思ふ。獨逸に於てさへも所謂無政府主義なる物は何等の勢力となつて居ない、又此は此度の革命に關係をもつて居ない。否、無政府主義の本家本元なる露國も今日無政府主義者の政府ではなく、今は無政府主義は何處に存在して居るかと云ふ程の有樣である。我國に於て無政府主義が起るなどゝは全然杞憂に屬する。有りもしない危險を杞憂して取締だの統一だのと云ふやうなことを騷ぐのは無用である、否却つて有害である。思想統一と云ふとは名前は眞に美しいけれども、國民の思想は決して統一すべき筈のものではない、これこそ獨逸の軍國主義の仲間入をするものである。ブートルーの『戰爭と哲學』の中にもあるやうに、又ミューアヘッドの『獨逸哲學と戰爭』の中に論じてあるやうに、獨逸に於ては資本的侵略主義を

鞏固にする必要上、帝國中心思想所謂權力崇拜主義なる物を以て國民の思想を統一しようと努め、凡てのものをホーヘンツオルレルン家を中心とするプロイセン中心の帝國に統一しようと考へたのである。而してそれは今日の如き悲慘な運命に陷つたのである。或る野心家があつて國民を無理に人爲的に强制して一時思想を統一せしめると云ふことは戀て國を亡ぼすことゝなる。獨逸の陷つた運命を顧みるものは再び左樣なことは考へざるべき筈である。

二十三

國民には種々の思想があつて思想は思想と戰ひ、種々の主義があつて主義と主義とが互に相練磨して行くに依つて國が發達し、文明が向上するのである。それを統一するなどと云ふことは洵に愚な話である。而して事實に於て思想統一など云ふことは決して出來る筈のものでない。凡そ國民の思想を自由にして、國民は其分に應じて或は學問の上に於て、或は產業の上に於て、或は技術の上に於て、各々の個性を發揮して行く事のみに依つて文明は進歩し、國運が伸びて行くものである。之を統一することは出來るとしても進歩はそれが爲めに止まつて了ふ。手短かい例を擧げて見れば『法典出來て法學亡ぶ』と云ふことがあるが、廣汎なる法典が出來て了ふと學者の多數は唯だ法典の解釋にのみ汲々として、自由なる思索を怠るやうになる。法典と法學との關係でさへさうである。然るに國民の一切の思想を一つものに統一して了へば、思想の進歩はなくなつて了ふ。國民の獨立心を滅却して了ふものである、之こそ眞に危險と云はなければならぬ。且又その統一せんとする所の思想なるものは果して健全であるか否か。假し是が健全であつても統一すると云ふことは不可である。反對に若しも統一せんとする思想にして、世界の大勢に逆行する所の頑迷思想であつたならば、危險は更に大なりと言はなければならぬ。健全の思想であるとした所で其健全と云ふことも一定の前提の下に於ける思想の上に於ての健全である。然るに人間の進歩と云ふものは不斷的のものであつて、決して停滯することのないものである。人類は思想の上に於て、生活の上に於て益々進んで止ま

ないものである。今一番進歩した思想であるとしても、之を統一して了へば之より進んだ健全なる思想が起らなくなつて了ふ。此意味に於て世界の大勢を無視し、或は之に逆行せんとする危險のある思想はその絶滅を圖らなければならない。

二十四

其絶滅と云ふことは決して權力を以てなすべきではない。唯だ思想の開發、自由なる言論を以てすべきのみである。即ち是を黎明運動と名付けたのである。黎明と云ふことは或は言葉が當を得て居らないかも知れない。今迄の日本の思想は暗黑であり、今迄の日本は暗黑時代であつたと云ふ樣に誤解せらるゝかも知れないが、吾々は決してさう云ふ意味で黎明と云ふのではない。日本には日本に於ける二千餘年の歷史あり、文明がある。之を外國の文明に比べても長短互に相競ふものであつて、德川三百年の鎖國の間に世界の進運に遲れたには相違ないが、日本文明の本體は決して世界の文明に劣つて居るものではない。日本に於ては尠くとも西洋に於て言ふ意味の暗黑時代はなかつた。吾々が黎明と名付くるのは、より明るくしようと云ふ意味に過ぎない。否進んで日本を世界の文明の嚮導者の地位に迄も進むると云ふことを黎明と云ふ言葉に依つて現はさうとして居るのである。而して何より先に先づ國民を黎明しなければならぬと考へて居るのである。黎明運動の當面の敵は世界の大勢に逆行せんとする頑迷思想之である。之に對抗するには吾々は學理的研究の立場に立つて、日本の國本を闡明し、日本獨特の長所が何處に存在するかを國民に普く知らしむるが第一と思ふのである。これが黎明の意味である。猶言ひ洩した點は他日の細論に期して、大略卑見の存する所を開陳するに止めて置く。

追記。『黎明』なる思想の哲學的意義、殊に其れと『啓蒙』との異同に就ては、長友桑木文學博士は、黎明集第四輯に於て、該博周到な解說を下されて居る。本書讀者の往見を切望する次第である。

八　國本は動かず

――大正八年一月十八日黎明會第一回講演同三月『同講演集第一輯』掲載――

一

私が今日お話し申さうと思ふことは國本は動かずと云ふことであります、近來デモクラシーと云ふことを言ふ人があるに付けて、之に反對して、斯樣なる思想が起つて來ると云ふことは日本の國體を危くする憂のあるものである、或は民本主義、民主々義と云ひデモクラシーと云ふ、兎に角左樣なる所の思想と云ふものは、直ちに危險思想其者でないかも知れぬが、一種の危險を包藏して居る所の思想である。之に對して日本の國體を擁護しなければならぬと、斯う云ふことを考へる人が彼方此方に在るやうであります。其爲に例へば國體擁護と云ふやうなことを盛んに唱へまして、現に我が黎明會の發起者である所の、吉野博士に對して立合演說さへ申込んで、諸君も其ことは御承知の通りの結果になつて居るのであります。人々の考は無論自由でありますから、西洋の思想が這入つて來るが爲に日本の國體が動搖すると考へると云ふことは無論人の自由であります。左樣に考へたならばどうかして動搖の無いやうに國體を擁護したいと云ふことを考へるのも是亦人の自由でありまして、吾々は之に反對するのではありませぬ。各々違つた思想を有つて居る者は其思想を公言して人と共に進むことを勵まなければならぬのであります。併ながら其國體が動搖する、國に多少なり危險を來すと言ふ人々の理由とする所を聽くと、全く何等の理由を成して居らぬと少くとも吾々は考へるのであります、若し西洋に起つて來る所の思想が、其度毎に日本の國體を危くするものでありまするならば、假令今一時國體を擁護することが出來るとしましても、十年十五年二十年の後に又何か新しい思想が西洋に起らないとも限らない、否西洋ではない日本に於て新しい思想が起らないとも限らない。進歩して居る限りは新しい思想は必ず起つて來るものと覺悟しなければならないのであります

す。新しい思想の起る限り、進歩の方向に向ふたんびに、其度毎に擁護をしなければならぬやうな國體であるとしたならば、吾々は其國體なるものに對して根本的に甚だ不安を感じなければならぬのであります。迫害者に對して危險は見なくとも、迫害せらるゝ虞れのある國體に就て深い憂を抱かなければならぬのであります。健全なる身體を有つて居る者ならば、多少不健康な土地に住つて居りましても必ずしも病氣に罹ると云ふことはない。體の弱い者ならば僅か空氣が惡い所、僅か水が惡い所、僅か光線の通りの惡い所に住めば直ぐに病氣になる、惡るい空氣惡るい水を怖るゝよりも吾々は身體の虛弱なることを遙かに怖れ憂へなければならないのであります。私共は日本の國體と云ふものは左樣な薄弱なものだとは決して思つて居らないが、所謂國體擁護論者が現れて來た爲に、左樣か、吾々の澤山の同胞の中には我が日本の國體を左樣に弱いものと思つて居つた人があつたのかと云ふことを初めて知つて、私共は實に喫驚したのです。恐らく日本人の大多數は私と感じを同じくするのではないかと思ふのであります、何となれば此若干の人々が國體擁護、國體の動搖と云ふやうなことを言出さなければ、日本國民全體は國體に對して何等の不安心をも今日まで有つて居らぬのであります。米の高い爲に不安心を有つ人は澤山ある、一般物價の騰貴の爲に生活を脅かされて居る人は澤山あります。併ながら其不安其動搖は國體とは何等の關係は無いのであります、日本の國體がどうであつたつて騰がる米は騰つたので、日本の國體を變へた所が米價は下りはしないのであります。物は廉くはならないのであります。是は誰人も皆知つて居る所であります。此米の高い物價の高いに對して吾々が經濟上の不安を感ずる所から來る所の動搖が國體には何も關係の無い如くに、デモクラシーの思想、或は民本主義と云ふか、民主々義と云ふかさう云ふものが起つて來やうが、或はもつと進んで社會主義と云ふことが盛んになつて來やうが、それが爲に國體と何等の關係を有つものではないと吾々は深く信じて居るのであります。

二

デモクラシーと云ふことは諸君も必ず御承知である通り、元と希臘のアリストートルが國體を三つに分けて、モナルキー、アリストクラシー、ポリテーとし其變體をチラニー、オリガーキー、デモクラシーとしてから一般に用ゐられるやうになつた言葉であります。以前も左樣な區別が無いことはありませぬけれども、アリストートルに至つて明白になつた現在のあらゆる國は――此あらゆると云ふのは當時の希臘で、此希臘に在る所の小さな國家は此三つの種類のどれかに屬するものであると云ふのがアリストートルの說明である。當時の狀態に於きましては甚だ適當して居つた所の說であります。故に若し今日此アリストートルの說が正しいので吾々が認めなければならぬものでありますならば、日本の如き君主國に於てデモクラシーと云ふことを言ふのはそれは不都合千萬、日本にデモクラシーの思想の起つて來ると云ふことは、是は一部の論者が杞憂する如くに、國體に對して動搖を惹起す所以であると無論言はなければならぬ。なぜならばアリストートルの分類に從へばデモクラシーとはポリテーの變體で貧民政治の國體を云ふのであります。日本は君主國であると云ふことは建國以來少しも易らないのですから、此易らぬ所の日本に對して右申す意味のデモクラシーが起るとしたならば是は革命と云ふことを來す外はないので、是は危險であります。從つてデモクラシーの思想は危險思想であると斷定しなければならないのであります。是は或は異論のある方もあるかも知れませぬが私はさう信じて居ります。所が同じアリストートルが國の種類を三つに分けることは右の如くでありながら、又別の所に於ては國の種類を二つに分けまして パシリコン、ポリチコンと云ふ二つにした。パシリコンと云ふのが一人政治、即ち國の主となる者が唯一人、ポリチコンと云ふのは國の主となる者が二人以上、多數の人である國、斯う云ふ風に分けて居ります。之を羅馬に至りましてはアリストートルのパシリコンと名づけたのを拉丁語でイムペリウムと云ひ、ポリチコンと云ふのは羅馬ではレプブリカと言ひました、此の二つが國家の形態の根本的の區別と云ふことに認められたのであります。併しながら全體としては矢張りアリストートルの三分法が一般に廣く行は

れて居つたのであります。所が中世になりまして此所に大なる、歐羅巴の政治學の中興の祖と言ふか、或は近世の實際の社會的、政治的、法律的學問の開祖と言つても宜しい大學者が伊太利に現れて來ました。其人はニコロ・マキアヴェリと云ふ人であります。マキアヴェリと云ふ人は非常に誤解せられて居りまして、殊に此度の戰爭に於て獨逸の軍國主義がマキアヴェリに胚胎して居ると云ふやうな頓でもない間違つたことを言ふ人が西洋にも日本にもあります。是はマキアヴェリに對しては非常に氣の毒なる誤解であります。マキアヴェリは左樣な惡黨ではないのであります。兎に角此マキアヴェリが盛んに政治論を致しました。其彼の出立點は國と云ふものにはモナルキアとレプブリカと此二つがある、モナルキアと云ふのは唯一人の自然人が主宰者となつて居る所の國を言ふ、之に反する所の他の總ての國は是は皆レプブリカである。斯う云ふ區別を立てまして、アリストートルが昔立てた二分法を採りまして彼は之を盛んに彼の議論の根柢として論じたのであります。話が長くなりますからそれから先きのことは申上げませぬが、それが即ち歐羅巴の學問の上に非常な影響を及ぼすことになつて今日迄も傳はつて來て居るのであります。併ながら又國の種類を三つに分けると云ふことも決して廢らないで殘つて來て居る、謂はゞ三分法と二分法とが同じやうな力を以て今日まで行はれて來て居る。其外國家の種類を色々に分つて、五つにも六つにも十にも二十にも種類を分ける學者は幾らもあります。それ等はどれが必しも全體を支配すると云ふやうな有力な說もありませぬ。有力なる說は國家と云ふものは三つに分けるか二つに分けるか、此二つに殆ど限られて居ると言つて宜しいのであります。

三

さて此マキアヴェリに至つて有名なる說になつた所の國家二分法に從へばデモクラシーと云ふことは國體の名稱ではないことになつて仕舞ふ。國家の形體の一つの種類ではない、或は多く分けたのに付いて更に細かい區分をする時にはデモクラシーと云ふことは或は言ひますけれども、國家の形體の根本的の種類ではない、是は寧ろ國家の其主權が假

今一人にあらうとも數人にあらうとも其兩者を通じて政治を運用する所の上の一つの主義と云ふやうに解釋せられるやうになつて來たのであります。吉野博士の民本主義論は大抵御存じだらうと思ひますが私の承はつて居る所では右申すやうな解釋を矢張りして居られるやうに記憶致して居ります。でありますからして君主國であつてもデモクラチックな事もありデモクラチックでない事も有り得る。レパブリックであると云つて必しもデモクラシーと限らない、否專制的なる國に於てもレパブリックと云ふものも隨分あつたのであります。最も近い例を擧げて見ますれば英吉利はモルナキーである、君主國であると云ふことは誰も疑ひを容れない所であります。所が其英吉利は非常にデモクラチックな國である、健全なるデモクラシーの發達して居る國であると多くの人は認めて居るのであります。私は必ずしもさうは認めませぬが、兎に角さう云ふ風に認められて居るのが多いのであります。君主國なる英吉利が非常にデモクラチックな所の君主國である。反對につい先達て亡びました獨逸帝國は右申した二分法に從ひますと共和國である君主國ではありませぬ。尤も是は學者の間に色々な說がありまして或人は是は多數政治國であると言ひ或人は是は民主的なる所の共和國であると云ふやうな色々な說を唱へて居りますが、誰も獨逸帝國はモナルキーだと言つて居る人は無いと言つても宜い位、と云ふのは成程獨逸帝國を構成して居る所の各聯邦の中には君主國もありますが又共和國もあるのであります。是等が寄つてたかつて獨逸帝國と云ふものを拵へて居るのであります。さうして此獨逸帝國と云ふものは獨逸のカイゼルが一人君主ではない、カイゼルと云ふ者は聯邦參議會の議長であるだけであります、故に是は多數政治國或はオリガルキーと言つても宜しいが、モナルキーとレパブリックとを區別すると云ふ區別に從ひますればどうしてもレパブリックに這入る、あれは共和國であるのであります。帝國と言ふから如何にも君主國のやうに聞えるけれども、それは名ばかりで、カイゼルと言ふから日本の天皇と同じやうにちよつと考へるが、あれは共和國の聯邦參議院の院長、參議會の會長、議會の議長たるに過ぎないのであります。其共和國たる獨逸帝國は

諸君が最近まで常に繰返して聞かされたやうに非常にデモクラチックでない。反對にオートクラチックの國であると云はれて居つたのであります。其說にも私は全部贊成は致しませぬが先づさう人が言つて居つたのである。又支那は今日共和國であります、併し雖人も今日の支那を以てデモクラシーの行はれて居る國と云ふ者はありますまい。

四

斯の如くモナルキーであつてもデモクラチックなものもあり、レパブリックであつてもオートクラチックのものが有得ると云ふ例は近く目の前にあるのであります。でありますからしてデモクラシーが君主國に容れられないものであると云ふやうな考と云ふものは、全然言葉の意味をも了解しない使ひ方である。若くは言葉の意味を了解してもアリストートルの昔に返つてアリストートルの說を其儘遵奉して居る人か、つまり、非常なる馬鹿か非常なる怜悧か此二つの種類の人でなければ左樣な誤解はしない。吾々平凡なる人間に於ては左樣なる誤解は起りやうが無いのであります。殊に吾々日本人に取りましてはデモクラシーに限りませぬ。社會主義であらうが社會民主々義であらうが（それから先きは別問題でありますが）、さう云ふ思想を持つ人が國中に居つた所が、日本の君主國たると云ふことは少しも變りが起るのでないと信ずる。なぜなれば吾々は日本人である。生れて來た時から日本人で今も日本人、死ぬ時も日本人である。日本人たることを迷惑に思ふ人もあるかも知れぬが私は斷じて迷惑に思ひませぬ、大に誇とするものであります。兎に角迷惑であらうが幸ひなることであらうが日本人であると云ふことは紛れない、日本人であるとして日本人として考へる。世界の人間として考へようと言ふけれどもそれは無理な注文である。日本の或人は此度休戰が成立したに付いて日本人は悅ばない、世界心が足りないからであると云ふやうなことを言つた人がありましたが、私には一向其意味が了解が出來ない。世界心と申したとて日本人として考へるより外ない、吾々が世界人として考へると言つた所で吾々は日本人である。英吉利、獨逸、伊太利何所の國の人でもない、空中飛行術が發達して空中に生活でも出來れば兎も角、

地上に住んで居れば何れかの國に屬して居る。日本人が世界人として考へると申しても其は日本人的に世界を考へるより外ない、デモクラシーを考へ社會主義を考へると云つても日本人が日本人として考へると、どうしても昔から君主國民として續いて居る日本人として考へる外はない。此國體をどうしやう斯うしやうと云ふ考は日本人として考へて居る限りは起らない。日本人としてゞなく物を考へれば出來ます、或は頭だけを英吉利人のやうに、或は亞米利加人のやうに、獨逸人のやうにして仕舞ふと出來ます。或は拜獨論者、拜英論者、拜米論者などゝ云ふ名前が附けられる人々はそれに陷る危險がある。日本などゝ云ふ國は詰らぬ、英吉利でなくちや行かぬ、獨逸でなくちや行かないと言ふ、語學の先生などの間には能くさう云ふ人がある、英語を一つ知つて居れば立派な大先生で、何でも彼でも英吉利か亞米利加でなければならぬやうに思つて、二言目にはあちらではあちらでは、と言ふ、あちらにも中々惡るいことがある、此等は驚くべき無智なる拜外論者である。さう云ふ人は日本人として考へて居るのでありませぬから、さう云ふ人がデモクラシー、ソーシアリズム、ボルシエヴキズムを考へる時には日本人として考へないからそれは危險である。社會主義が危險と云ふのではない、過激主義が危險であるのではない、日本人として考へないと云ふことが危險である。吾々が日本の人間として考へて居る以上には普通の社會の問題には何も危險は無いが、所謂脱線をして常軌を外れまして物を取調べ物を考へるやうになれば、是は巣鴨の病院へでも持つて行くにあらざれば危險である。日本人が日本人として考へて居る以上は、如何なる思想を抱いても國體に對する危險と云ふことは決してない。或一部の人に取つて危險と云ふことはありませう。例へば資本主が溫情主義でなくては行かぬと考へて居る、勞働者が勞働組合主義を熱心に尊重して行けば、溫情主義なる資本主に對しては、勞働組合的の思想は危險でありませう。併し乍ら、國全體に對しては之は危險思想でも何でもない。國全體から言へば却て健全なる思想であります。國體と云ふものは誰人も之をきめたものでもなければ、誰人も自分一己の考を以て改造し得るものではありませぬ。然らば此國

體に對する危險と云ふことは日本人が日本人として物を考へない場合の外には私は有得ないと思ふのであります。即ち日本に於いてレパブリカニズムを主張すると云ふならば是は危險であります。日本人が日本人として考へるならば、例へば政治の點のみに考を集注するとしましても私は決してレパブリカニズムなどを主張する人などは一人も無いと斷言して差支ないと思ふ。今日の問題は左樣な所の國の形體に觸れやうと云ふのではない。遙にそれより手近な、遙に手前なる所の問題を取扱つて居るのであります。世上一般の說に從ひまして此度の獨逸の大敗北はオートクラシーがデモクラシーに大負けに負けたのであると看做します。是が爲に獨逸の國體が變更されたのではない。露西亞に於ては國體の變更である、墺太利に於ては國體の變更である、殊に匈牙利に取りましては變革であるが、獨逸に於ては國體の變革ではない、カイゼルが退位して共和國になると云ふのは、一つの種類の共和國から他の種類の共和國になると云ふだけの話、私はさう云ふ風に解釋して居るのであります。但し聯邦に於ては國體の變革が起つたことは疑はありません。所が獨逸に於て今までオートクラシーであつた所のものが、デモクラシーになつたと云ふ。此デモクラシーと云ふものはどう云ふ種類のものであるかと言ふと、是れは私共が考へて居る、私共が主張する所のデモクラシーではないので、名前はデモクラシーであるけれども大變違つたものであると思ふ。併ながら其デモクラシーでも私は日本の國本が動かない限りに於ては何等の危險をも日本に來す物でないと斷言するものであります。此獨逸に打勝つた所のデモクラシーとは社會民主々義、ソーシアル・デモクラシーであります、私は此說が日本に行はれるやうになりました所が、日本の國本は是が爲に少しも動かないと堅く信じて居るのでございます。露西亞に蔓つて居る所の過激派の思想が日本に這入つて來ても、私は日本の國本は決して動かない、斷じて動かないと信じて居るものであります。然るに彼の國體擁護論者は其所まで行かない、社會民主々義の何であるかに思ひ及ばないので、普通誰人が見ても當り前と見て居るデモクラシーの思想を目してさへも、是が爲に國體に危險が釀される

と考へて居ると云ふのは私は彼等は果して日本人であるか否やすらをも疑はざるを得ぬのであります。吾々日本國民が自分の國に對して左樣な薄弱な信念しか持つて居らぬのでは斷じてない、吾々は吾々の父祖の時代から今日に至るまで、國體の動搖、國體の危險など、云ふやうなことは夢にだも思はなかつたことで、十分なる信念を國に置て今日に至つて何等の不都合は見ないのであります。無論時勢に先立つて憂へると云ふことは甚だ結構なことでありますから、ごく微細なる所の危險でも、加はらんとしつゝある傾向があるのならば、聲を大にして是は危險である。此危險は今に於て未だ其小なる中に之を防止しなければならぬと云ふことを叫ぶと云ふことは、國を憂へる熱心は大に敬服すべきであります。然し何もさう云ふ危險が無い。何も動搖が無いのに危險がある動搖があると云つて自らも騷ぎ他の者を騷がすと云ふことは、私は日本人としては如何にも自信の無い、如何にも自らをも信ぜず國をも信ぜず、同胞をも信ぜず人をも信ぜざる所の甚だ意氣地の無い所の人々であると斷ぜざるを得ないのであります。

五

危險は私の考では日本人が日本人として物を考へないと云ふ所にある。是はごく少數の人に止まるのであります、日本人の全體から言へば左樣な憂は無いと言つても宜い位、左樣な所の人々と云ふものは成程一時は或部分には勢力を得ることがあるかも知れませぬけれども、國の全體の人から言へばごく少數でありますから、健全なる輿論の爲に必ず征服せられて仕舞ふ、特に之を撲滅するとか特に之に對抗すると云ふ必要のある程の力を得ることはないと信ずる。之に反して國を思ふことは甚だ厚いのである、決して國に對して不忠なる考を有つて居るのではない、唯見識の狹い其の眼光の屆かないが爲に、國體に對しては何等かの危險が起りはしないか、國體が何等かの動搖を來しはしないかと云ふことを怖るゝ所の杞憂、此杞憂に基いて、而も忽卒なる所の運動をする所の人々が若し日本に殖へるのならば、是は甚しい所の危險を釀す基になると吾々は信じて居る。なぜなれば戰爭前の世界の形勢でありましたならば別問題で、其時代で

あると云つても其憂はないと言へませぬが、戰爭の終りました今日の世界に於きまして
は日本と云ふものは戰前の日本とは大變に地位が違つて居る、其一擧一動は悉く世界
の人に依つて熱心に注目せらるゝ所の日本である。先刻も今井博士からお話があつたや
うに、日本人は西洋人に對して劣るものだと考へるやうな行動を爲して居ると仰せられ
ましたが誠に其通り、成程進歩の上にも進歩して欲しい、良くある上にも更に良くあつ
て欲しいと云ふ點からして吾々は批評を致す、新聞紙に於ても政治家に批評を加へ或は
實業家に批評を加へる。所が日本では誠に是が無遠慮である爲に、今まで誠に立派な人
であるとして一般に尊敬せられた人でも一度大臣にでもなれば必ずいつかは世の中の惡
口雜言の的となると云ふことを覺悟せなければならぬ。最も手近い例が、或外國の全權
公使若くは大使として居つた時分には、新聞紙に於て雜誌の上に於て又一般の會話の間
に於て褒められるのみで在つた人が、外務大臣になると翌る日から惡口を言はれる。
掌の裏を返したやうに惡るく言はれる、大抵外務大臣になつた人は同じやうな歷史を

繰返して來て居る。否大臣ばかりではない東京市長で以て惡口を言はれないで濟んだ人
は殆ど無いと言つても宜い。市長にならなければ例へば憲政の神樣尾崎行雄先生の如
き、市長になつた爲に散々惡口を言はれてとう〳〵退いて仕舞はれた。阪谷男爵がなら
れても同じこと、今現に田尻先生の如きは盛んに惡口雜言を浴びて居られる、市長にな
られる前の田尻先生と云ふものは褒められてのみ居つて、殆ど惡口なんと云ふ者はどの
雜誌にも出たことはない、人格の高い人と言つたが、市長になると云ふとあれは無能の奴
ぢやと云はなければ時候の挨拶も出來ない位になつて仕舞つた。私は田尻先生を辯護
する積りでもない、外務大臣を辯護する積りでもないが、日本では公けの地位に立つと
之に對しては言論機關は斬捨御免、今日は罵り捨御免、斯う云ふ有樣になつて居るので
あつて、私のやうな臆病な人間は其點から言つても大臣や市長にはなりませぬ、御免
を蒙ります。尤も西洋でも其傾向はないとは言へませぬが、日本のやうに滅茶苦茶な亂
暴な無遠慮な罵倒國といふものは無いのであります。さう云ふ罵倒論を見ると日本は滅

茶苦茶に可けない、政治家も可けなければ財政家も可けない、實業家も可けなければ何も彼も可けないやうに考へるがさうではない、吾々はさう云ふ言論のみに依て頭を充たして居るけれども西洋人はさう見て居らぬ、日本の本當の直打を見て居る。殊に戰爭前と戰爭後の、世界の日本に對する見方と云ふものは非常に違つて來て居るのであります。晴れの舞臺に上つた、兎も角も日本は一人前の所謂一のパワーになつて居る。其日本に於きまして國體が危い、國體が動搖する、而もそれが世界の人が見て少しも怪まない、最も進歩した思想であると認めて居るものが、若干の人に依て唱へられるが爲に、其國の抑々立つて居る立國の大本が動くと云ふことを若し世界の人が聞たならば、さうか日本と云ふ國はそんなヤクザな國かと今度は侮り始めるに相違ない。海軍は精鋭である、陸軍も精鋭である、又近來は富の力も大變增した、日本は侮るべからざる所の國と思つて居つたが、併ながら國の因て立つ所以、其國體が僅かな外來の而かも健全なる思想の爲に直に動くやうなものであるとしたならば與し易きのみと外國の人は思ふであり

ませう。まことに日本の一切の事情を研究して事實を調査した人は左樣なことに依て惑はされなくとも、唯新聞の記事に依て雜誌の記事に依て日本を判斷して居る所の大多數の外國の人は、左樣な報道を聞けば直ちに其の判斷に狂ひを生じて來ると云ふことは免れないので、此國民的の尊敬、國民的の威嚴の失墜が戰爭を惹起し、外交談判を困難ならしむるに大に與かつて力があるのであります。無論虛勢を張つて置くと云ふことは駄目であります、無いものを有るが如くに見せやうと云ふのは駄目でありますけれど、日本の國本と云ふものは牢乎として動かない、二千年來の國の立つて居る所以は易らない、政治上の變化はあつたが變化は進歩である、國の因て立つ大本に至つては日本のみは少しも動かない國であつた、今も動かない、將來に於ても磐石の如く動かないものであると云ふことは、外國人に對しては國として第一の自慢たるのみならず、道德的に自から力を用ゐずして外國人をして尊敬せしめ、外國人をして日本に對する畏敬心を起さしめる最も有力なる事と存じます。此ことは一月號の中央公論に於て吉野博士が詳しく

論じて居られるやうに考へますが、吉野博士の御論と其點に於ては私は全然同論であります。是は或人は國體の精華を外國まで發揮する、萬世一系の日本の國體を世界に知らしめると云ふことで以て隨分久しい前から唱へて居つた所であります。否德川時代の日本人の著述を見ますと、日本は神の國である。其他の國は斯う云ふやうな國體を有つて居らないから、此特殊なる國を外國に知らせてやらねばならぬと云ふことは、本居平田等の人々を始めとして隨分之を唱へて居るのであります、之と同じやうなことであります。併ながら私はさう云ふ唯國の自慢と云ふ點ではない、世界の今日の有樣と云ふものは皆國と國とがギリ〳〵一杯に立つて居るのである。少しでも隙があれば其隙に乘じやうと云ふのであります、卽ち國本がグラ付く等と外國人に思はせるとは其隙を見せる所以となるので甚だ以て恐る可き危險と信じます。是は或は黎明會の同人と私との考が大分違ふかも知れないと思ひますが、私は世界の平和を望むことは勿論でありますが此度の戰爭は世界が平和に向つて進んだのでない、平和の方に後を向けて逆行しつゝあるものであると考へる。世界は愈々劍呑になつたと云ふのが私の有つて居る堅い信念である。世界が物騷であるから、斯樣なる所の日本の國體に對する不安などゝ云ふことを少しでも持つと云ふことは非常なる危險思想であると云ふことを痛切に感ずる。世界が平和に向ふ時節、國と國との間に於て强い國が弱い國を虐げ進んだ國が遲れた國を虐げることがないならば、左樣なる緊張したる態度を執らなくても宜い、少々位は頑冥なる思想が蔓つた所が蔓るに任して置て宜しい、それだけの餘裕がある。所が私の見る所に依りますると、世界は愈々緊張し愈々切迫して愈々不安が增して來たから日本の國中に少しでも芥塵を置く、だぶつかして置くと云ふやうなことがあつてはならない。此國中にあるありと有ゆる間違つた考、古い考を有つて居る人、頑冥思想を有つて居る人が當り前の人と同じだけの米を食ふ。一人前の米を食つて頑固思想を有つて居ると云ふことは不經濟千萬なこと、斯う私は考へまするが故に、此度此黎明會と云ふものが出來るに付て、私は熱心を以て之に加盟致して此頑冥思想を退治して、

國中に少しでも無駄飯を食ふ人の無いやうにしたいと云ふことを考へて、第一回の講演會から罷出た次第であります。日本の國本が若し少しでも動く憂があるのならば之を憂ひて呉れると云ふことは有難い、さう云ふ人は尊敬して敬を聽て、少しでもさう云ふ危險のあるものは之を防がねばならぬ。所が左樣な憂の少しもないのに、さう云ふ間違つた考に基いて、而も人の心を動かすやうなことをすると云ふことは、是は甚だ危いことであります。社會民主々義が獨逸に於て勝を占め又露西亞に於ても勝を占めて居ります、其最も純粹なる形は名けて過激派思想と云ふ、卽ちボルシエヴキズムであります、過激派思想と云ふ特別なるものがある譯ではありませぬ、ボルシエヴキズムと云ふ特別なるものがある譯ではありませぬ、是は社會主義の最も純粹なる形、時世に最も迎合しない阿らない主義を有の儘に端的に出した形に外ならないのであります。

六

日本では過激派思想と云ふと、是は社會主義とは又一つ別な所の主義があつて、戰つて居るやうに考へて居る。成程露西亞に於きましてはボルシエヴキズムとブレヒアノフを首領とする所の少數黨と戰ひました。又現に今獨逸に於きましてスパルタクス・グルッペと稱する一派が（日本では過激派と稱へて居る）、社會黨の現政府と戰つて居る。恐らく今日今晩頃も倘盛んに戰つて居りはせぬかと思ひます。であるから此二つが相敵對した所の主義であるやうに考へて居る。それで或人は過激派思想は行けない、是は危險であるが社會主義、殊に溫和なる社會主義ならば這入つて來たつて差支ない。是は大丈夫であると斯う云ふ區別をする人がある、私は此區別が大變に危いと思ふ。溫和なる社會主義などゝ云ふものは世を忍ぶ假の形、ほんの一時の假の形、今日溫和なる社會主義などはありはしない、ありとすれば時に錯誤であります。此溫和なる社會主義でも日本人が日本人としてゞなく考へて其主義を奉ずれば危險になると思ふ。反對に所謂過激派の思想でも日本人として考へて見る以上は何等の危險を日本には意味せない。なぜならば日本人として考へる以上はボルシエヴキズムも何もし得ない。唯思想上の一つの產物

に止まる。多數の人が此思想に化すると云ふことは斷じてない、日本人として考へて居る限りは決してないと思ふ。併ながら日本人が日本人として考へるのでない場合には、過激派思想でなくとも又溫和なる社會主義でなくとも所謂デモクラシーの思想、溫和なるデモクラシー、當り前のデモクラシーと言はれる思想でも是は危險を誘引すると堅く信じて居る。殊に英吉利や亞米利加で謂ふ所のデモクラシーと云ふのは、是は主として第三階級の爲に、主として資本家階級の爲に其自由、其活動を要求する所の一つの主義であつたのであります。さうあらねばならぬと云ふ譯はない。道理の上に於てはさうあらねばならぬ譯はありませぬが、それは空理で實際の現在の事實としては今日までデモクラシーと言はれて居るものは、資本家階級の自由と活動とを要求する爲に、そればかりではありませぬが主として其爲に主張せられた所の主義であるのであります。此所でちよつと私は辯明をして置く要を感じます。一兩日前に發行した日本及日本人に、慶應義塾の者は普通選擧尙早論を稱へる、田中教授並に私の名前が書てありましたが何の間違でありますか、私は普通選擧尙早論などは唱へた覺えはないのです。私は普通選擧論と云ふことは尙早どころぢやない遲れ過ぎて居る。だから今更こんなことを標榜して大騒ぎをやるのが馬鹿々々しい、其意味で私は黎明會で普通選擧の主張を具體的にしやうぢやないかと仰しやつたことに反對した。黎明會の事業はもつと先きのことを考へる。普通選擧と云ふやうな落ちて來るやうな熟柿に向つて居るのではない。其例は獨逸に在る。獨逸に於て抑々社會黨が出來まして、それは此前青年社會政策學會の時に話しましたが、（其速記前段に收む）社會黨の二つの綱領は、一つは普通選擧、一つは勞働者の生産組合を立てる爲に國庫から補助を貰ふと云ふことであつたのであります。ビスマルクは敵の武具を奪つて普通選擧を採用して仕舞つた、であるから二つの取つて置きの題目として標榜した一つは却て官僚のビスマルクの爲に取られて仕舞つたから其運動は挫折して仕舞つた、そこで彼等の運動と云ふものは停止して仕舞つた。國庫から補助を貰ふと云ふことは是はとう〳〵出來ませぬでしたけれども、ラサルが生きて居つたら出來た

かも知れないがそれは大したことでもない。普通選擧のことはさう力を入れてやらぬでももう落ちて來るばかりになつて居る。それよりも何か新規の題目を掲げてやるが宜いと云ふので、そこで吾々は普通選擧と云ふやうな手近なことは止さう、それは外の人がやる、もつと暇のある人にやつて貰ふ、吾々暇の無い者はそれよりももう少し先きのことをやらうと云ふので普通選擧運動に反對したので、普通選擧其ものが尙早と云ふことは反對であるので私は普通選擧が行はれました所が大した重きを持たない、選擧權をみんなが持つ、多數の人が選擧權を持つのは糞はしいことだが、併ながら今日の日本の政治道德では選出せられる人が替りまして替り榮の無い人が出はしないか、第一流の人間は議會などへは行かない。尤も議會には第一流の人間が居ないと言ふのではない、行かないと言ふので、行かなければ居ないことになるかも知れませぬが兎に角行かない。昔政治と云ふものが大切な時代に在つてはさうではないが、諸君、今日は最早政治萬能の時代は過ぎて仕舞つて居ります。政治々々と云つて政治が何よりも重大だ、男子

苟も志を立て名譽心を持つて世に立ち、大に爲さんと思へば皆政治に向つたと云ふ時代は十九世紀のことであつて二十世紀のことではない。私は『政治は人文の一切にあらず』と云ふことを繰返して主張して居ります。殊に慶應義塾に於てそれを能く言ひましたのは慶應義塾に於ては政治々々と言つて政治が何よりもえらいと思つて居る、其迷夢を醒す爲に慶應義塾に於ては政治は人文の一切にあらず、あんなことは惡黨のすることだと云ふことを始終唱へて居る。其言は少しく極端であるかも知れないが私はさう思ふ、今日までの政治家と云ふ者に碌な人間は一人も無い。さう言ふと大分お咎めを蒙りませうがルーズベルトなどは大なる山師、大なる役者であつて人格の人でも何でもない。あれは日本の大恩人などゝ言ふ人がありますが其馬鹿さ加減に驚く、日本の大敵と見るのならば間違つて居る中でも間違が少い、大恩人なんて頓でもない話だ。現在より過去に溯つて見ても、ビスマルクを誰もえらい道德家だとは見ませぬが、英吉利には道德家の看板をかけた政治家があります。例へばグラッド・ストーンが人望の高い人

でありましたらうが、彼が政治家として居る中にはひどい事がある。昔の人は止しまして今生きて居る一番吾々に關係のある人を捕まへますと、卽ちエドワード・グレーは戰爭の始まる頃は英吉利の外務大臣をして居つた人で、近頃は國際聯盟と云ふことを初めて稱へ出した人、ウキルソンに亞いでの人類の大恩人大救世主と尊敬して居る人が日本にも少からずあります。此エドワード・グレーと云ふ人はどう云ふ事をした人であるか。彼は千九百十四年七月十日英國の下院に於きまして演說をして曰く、『向後英吉利國は英吉利の資本にして世界の何れの部分にも投下せんとを欲し、而して其投下に對して相當なる所の利權の割讓を求むる時があり、若し之に對して有力なるべき政治上の反對存せざる限りに於ては、英國政府は其の全力を擧げて此の資本家の要求を貫徹するに努むべく、殊に相手方政府、卽ち利權を割讓すべき義務ある政府に對しては、其の利權の割讓はそれが鐵道の建設であれ何であれ、割讓すると云ふことは單り英國の利益たるのみならず其國の利益であると云ふことを合點が行くまで說得することを努むべきものとす』、斯う云つて居ります、私は是は意譯をしましたから本文の通りではありませぬ。原文は近く發行になる『我等』と云ふ雜誌があります、其第一號に長い論文にして書てあります（第一篇十六を見よ）是はどう云ふことから正確なことは其雜誌を御覽になることをお願ひ致します。

とを意味するかといふと、當り前の日本語に直して見ますと斯う云ふことになる、英吉利は向後資本家が外國政府に利權の割讓を迫る場合には、其の資本家が自分で以て利權を取つて來るに拋擲しないで、政府の力で彼等を護衛して、相手方政府を屈服するまでやらすべしと云ふ、之を名けて資本的帝國主義、經濟的侵略主義と言ひます。是はグレーが千九百十四年に發言しましたけれども、千八百五十年に英國の外務大臣であつたロード・パーマーストーンが同じやうなことを主張して居る。是が英吉利の國是であるとエドワード・グレーが平氣で公言をしたのであります。所が左樣なる公言を爲す所のエドワード・グレーが國際聯盟を主張して居ります。國際聯盟が出來ましたら一時戰と云ふものは或ひは抑へられるかも知れませぬ、武器を以て戰ふ軍は抑へられるかも知れませ

ぬ、英吉利の爲には仕合せなことであります。英吉利は陸軍は下手で弱い、陸軍が無くなつて仕舞ふ、徴兵制度が廢されると云ふことは願つてもない宜いことだ。それと同時に海軍も廢して仕舞ふのでなければ何にもならぬがソレは何とも言はぬ。否米國の海軍は擴張すると言つて居る。現に海軍は大擴張をやつて居る。世界の平和、世界の正義の爲に獨逸を亡ぼし、國際聯盟を主張する他方に於ては戰の道具をどん〳〵擴張すると云ふ。其海軍の大擴張と云ふものは何の爲めにするかと言ふと、必しも實戰の爲めに備へるのではない、英吉利の海軍は實戰の爲めと云ふよりも、資本的帝國主義の道具として大に役に立つ、此實例を擧げると大分長いことになりますから略して置きます。他の國の材料に依らず英吉利人が認めた材料を持つて來ても幾らでも例がある、英吉利人は之を名けて『ネヴアリズム』、獨逸のミリタリズムを軍國主義と譯しまして軍國主義撲滅せざるべからずと云ふことを開戰の初めから主張して居る。然るに『ネヴアリズム』と云ふと文明的なるものゝやうに聞えるが、意譯致しますと海賊主義、海の泥棒主義であります。泥棒と云ふものは僅かなる船に積んだる在荷を取るだけであります、何萬噸積んであつても財と云ふものは限りがある。然るに英吉利のネヴアリズムは國全體を攫つて持つて行つて仕舞ふ。海賊主義と云ふ言葉は弱過ぎます。乍去支那語にも日本語にも『ネヴアリズム』を現すべき、強い泥棒を現はした字が無い。據ろなく私は之を海賊主義と譯します。英吉利人でもそれは認めて居る、ネヴアリズムと云ふものは直ちに戰をすると云ふよりも平時に於てやる。卽ち之を平和の戰爭と云ふ、或は經濟戰爭、詰り人の國を奪取る。或は國を奪はないでも國の平和的產業の結果を奪取る。此資本家を特に擁護する爲に大なる海軍を動かす、又非常なる經費を使つて英吉利の外交機關を充實して置くと云ふことは、是はデモクラシーと云ふ名前の下に主張をさせられて居るけれども、吾々は決してそれはデモクラシーとは思はない、それはブルートクラシー、民主々義ぢやない富民主々義であります、英吉利で言ふ所のデモクラシーと云ふものは眞正のデモクラシーではない、ブルートクラシー若くはブルートデモクラシーであ

ります。亞米利加に於て言ふ所のものもそれである。錢と云ふものが大變大切である。議會に於て資本家の後援を得て置くと云ふことが大切である。政黨と云ふものが大切になつて政黨内閣と云ふものが要求されたのは資本家閥の爲めである。英吉利に於ては政黨内閣と云ふものは資本家閥が無ければ圓滿に行はれない、ロイド・ヂョーヂと云ふ人は偉い人ではあるが、タイムス新聞の持主ロード・ノースクリッフと云ふ人に使はれて居るやうなもので、ノースクリッフが打遣つて仕舞へと言つて打遣る方針を執つたならば此度の選擧の結果は大に違つたらう。日本でも新聞社會に大なる資本閥が起つて來まして、政治上の或力と結託をする、勿論新聞界の健全なる分子ではないが斯ういふことが大分起つて來るやうであります。併ながら之を英吉利のタイムス新聞以下の金權政治に比ぶれば迚もお話にも何もなりはしない。ノースクリッフは一方にタイムスを以て輿論を製造する。英吉利人は數ペンスを投じて其政治上の意見を買つて其れで空なる頭を塡充する。而してノースクリッフは其製造した其輿論に丁度うまく適當する樣な政治家を拵へてそれを内閣へ送る。是が少し遣り損ひをすれば、其遣り損ひを當り前のことゝ思はせるやうに輿論を變へさせる。それで其政治家が愈々可けなければどうにかして替へさせる。ノースクリッフは選擧人が殖へたつて殖へないたつて大した違ひはない。選擧權の擴張は宜いことゝ考へて居るがそれは表面の話、眞の國の素質ではない、日本にはさう云ふ大勢力家は無いが、資本閥が後にあつて繰つると云ふことは段々增して來ます。さう云ふ政治と云ふことに吾々は力瘤を入れる氣にはなれない。其政治の運用に於ては選擧權の擴張も縮少も、普通選擧も制限選擧も、吾々は殆どどれでも宜いと思つて居る、と云つて何うも拋つて置く譯に行きませぬ。普通選擧の行はれる爲には力を注がなければならぬが、それで非常に良くなるだらう、非常に結果が擧がるだらうと思へば必ず失望に終つて仕舞ふ、と云ふのは政治では決して本當のデモクラシーは行はれない。本當のデモクラシーと云ふのは何であるかと言ふと、それは今日の社會の根柢に於てデモクラシーを最も妨げて居る所のものを取去つて仕舞はなければ出來ない。デ

モクラシーの起ることを妨げて居るものは政治の上にも成程あることはあります。又政治外の社會の生活の上にも彼方此方にあることはあります。けれどもそれは根本的のものではない附隨的のものである。根本的のものが落ちて仕舞へば、自ら其の力が衰へて來るのである。其根本的のものを見ずして唯政治の上だけで以て幾らデモクラシーを望んでも、又さう云ふやうな形式が幾ら備はつても、決して本當のデモクラシーが來るものではない。それは私が名けて言ふシユードデモクラシー、嘘のデモクラシー、虚偽なる民主々義形の上に於けるデモクラシーで本當のデモクラシーではない。本當のデモクラシーと言へば、デモスと云ふのは民、クラシーと云ふのは支配と云ふことである。而して其の支配と云ふのは政治上の意味から言へば日本はモナルキアでありますから上御一人が支配なさります。從つて之に就て彼此れ問題は無い。其意味に於てデモクラシーなんと云ふことはちつとも考へられない、唯其運用の上に於て吾々は問題を見出すのであります。其問題は何であるか其は外でない。我々は生きて行かなくてはならぬ。生存して行かなくてはならぬ、吾々の生存を確立すると云ふ所の必要より眞正のデモクラシーを要求する。即ち國に生れて來た者は如何なる無能なる者であつても、如何なる低能な者であつても、如何なる卑しい者であつても、人間として恥かしからぬ生存の出來得るやうになつて居る社會、若くは國と云ふのであります。其方に向つて行く有ゆる運動、有ゆる傾向を名けてデモクラチックと私は名けるのであります。其方に向つて行くのでなければ選擧權の擴張でも普通選擧でも私は少しもデモクラチックとは認めない、所が斯う云ふ國の中、社會の中へ生れて來る者は如何なる微賤なる者と雖も、人間として恥かしからぬ生活をして行くと云ふことは今日出來て居ない、何等の保證も之に對して與へられてない。そこで私は第一に國の憲法の土臺に國民の生活を保證すると云ふことを認めて貰ひたい。明文に必ずしも現はさなくても宜しうございます。日本の憲法は歐羅巴の憲法を模倣したのですが、歐羅巴現在の憲法と云ふものは財産階級、資本階級が取つて來た憲法であります。資本家階級が其國の最高の權力者又は第一第二の

階級から奪つた所の一つの詫證文であります。斯く言ふと、憲法を甚だ詰らないものゝやうに私が考へて居ると云ふ譏りを受けるかも知れないが、詰らないものと考へて居るのではない、詫證文を取つて置て臭れたからこそ色々なことが出來たのです。さう云ふ詫證文無かりせば吾々の今日の生活と云ふものは不安心である。乍去此詫證文に於きましては主として第三階級、即ち動産階級の利益を本位として箇條が設けられてある。昔は土地を有つて居る者が經濟上に於て一番威張つて居るから是がいつも政治上に威張つて居つた。英吉利の議會は地主若くは地主の代表者ばかりで固めて居つた議會であります。それが千八百三十二年の選擧法改正で變りまして、今度は地主ではなくして動産を持つて居る、所謂資本を持つて居る階級が一番威張れるやうになつて居りますのです。今日の憲法政治と云ふものはそれに丁度合ふやうに出來て居るのです。でありますから日本の方にもありますが西洋の憲法に於きましては身體財産の不可侵と云ふことが規定してあるのであります、殊に財産の神聖が重大なことゝして規定してあります、例へば先度の内閣に於て暴利取締令を出した時に、憲法違犯である財産の不可侵と云ふ憲法の根本に背くからと云ふことを八釜しく言ふ人がありましたけれども、是は憲法の條文の上から解釋すると正しいと思ふ。仕方がない。併し乍ら財産不可侵一點張と云ふことが最早時勢遲れであります。今日は財産より貴いものがある。昔と雖もあつたのですが其時分には存在を認められなかつた。今日は少くとも其の存在は認めてあります。

七

昔は財産の無い人間は家畜と同樣に認められて人間と認められなかつた。今日は財産の無い勞働のみに依て生活する者でも人間として認められるやうになつた。さてなつて見ると其數は非常に多い。財は無くして勞働に依て生活する者が國民の大なる部分を占めて居る。其大部分を占めて居る所の無財産者階級に對しては財産不可侵の箇條は殆んど無關係である。生存の不可侵、人間として存在の尊貴と云ふことが何よりも一番貴いのである。是は今日の憲法には明文の上に載つて居ない、それよりも遙かに痛痒を感ず

ることは少い所の財産の不可侵と云ふことには大變に重きを措てある。であるから米の買占などをして國民の生活を脅かす者があつてそれを取締らうとしても、憲法の財産不可侵の條文に背くぢやないかとやられるとギュッと參る、參る譯です、それだけ時代錯誤的になつて來たのです。乍併憲法の條文に於て書く必要はない、さう云ふ精神を持つて行きさへすれば宜い。卽ち是からは社會と云ふものは財産が一番貴いものであると云ふ趣旨を修正しなければならぬ。財産も尊重しなければならぬがそれよりも貴いものは人の生存である。生存を一番貴いものとして國の正義、國の社會的の施設、否、國の一切の計畫と云ふものは、先以て國民全體の生存の安全、生存の不可侵、生存の保證と云ふことから着手しなければならない。それでなければ幾ら選擧權を有つて居たつて食べることが出來なければどうすることも出來ない。代議士を選ぶよりも我身、我妻、我子が其日々々を人間として恥かしからぬ生活をして行くと云ふ方が遙かに大切である。

私は若し國民が人間として生存を十分に保證せらるゝことが出來れば選擧權などは無くても宜いと申さんとするのであります。暴論と言はれるかも知れぬが畢竟吾々は何の爲めに選擧權を欲しいか、選擧權を行使するのが國民として先以て人間として恥かしからぬ生活を爲し得て、後に國の進歩國の大なる文明的使命に與かりたいからである。然るに吾々の生存其ものが保證されない、生存其ものが非常なる不安に置かれて居る間は何事も始まらない。政治上の一般の機關をいくらいぢくり廻して見てデモクラシー〳〵と言ても何がデモクラシーであります。卽ち私は英吉利や亞米利加に今現在——他日は無論變つて來るでせうが、今行はれて居るデモクラシーなるものは嘘も嘘も眞赤な嘘のデモクラシー、左樣なものが流行ると云ふことは一向歡迎する値打はないと私は考へて居る。他方に於て社會民主々義ソーシアル・デモクラシーと云ふのは是は第四階級の專制を主張するものであります、卽ち其の說に依ると今迄の世界と云ふものは奪掠の歷史であつて、階級と階級とあつて一つの階級が他の階級を奪掠しつゝある、其奪掠者となる階級と被奪掠者となる階級とが變つたゞけで、土地を有つて居るものが土地を有た

ない者を奪掠し、動産を持つて居る者が動産を持つて居らない者を奪掠して居るのが現在の時代である。斯くの如く奪掠し合つて居る今日に於ては、どうしても被奪掠者が先づ自覺して立たなければならぬ。さうして此奪掠と云ふことを止めなければ行かぬ。今日奪掠せられて居る處の第四階級なるものは此被奪掠者の最後のものである、此最後の被奪掠者が奪掠を免れることになれば、それ以下の階級は無いのだから最早奪掠せらるゝ者はないことになる、即ち奪掠と云ふことは止んで仕舞ふと申すのです。而して更らに論を進めて申すには其奪掠を止めるには、被奪掠者たる階級が有ゆる他階級に對して戰爭を挑まなければならぬ。之を名けて階級戰爭と云ふのであります。諸君、若し斯の如くにすれば矢張り階級と階級が爭つて行く所の戰爭が國内に續くのであります、國と國との間の戰爭が無くなる位は何でもありません、國際間の戰爭は悲慘ではあるけれども四年か四年半も經てば濟んで仕舞ふ。國内に於ける階級戰爭と云ふものが始まるとしたならば五年や十年で終るものではない。此度の露西亞の如きは別でありますけれども、普通の場合に於てはさうでない是は誠に厄介な話、それよりも未だ〳〵國と國との間に慘虐の行はれる戰爭の方が短くて濟ひだけ可い。戰爭は國際間に於ては宜けない、國内に於ては宜いなどと云ふ道理はありません。如何なる形に於ても宜くないのです。であるから私は階級戰爭に依て此奪掠を止めべしと云ふ說には徹頭徹尾贊成することが出來ません。道理の上に於ても、――實際の上に於ても、將た感情の上に於ても贊成することは出來ません。而して斯く主張する社會黨が他方に於て最も熱心なる戰爭反對論者、世界平和論者であるのは矛盾も亦極まれりと信じて居ります。併し右の樣な說を日本に於て主張する者が殖へても日本に於ては危險ではない。十分にお互に議を盡し合つて何れが正しいかと云ふことを論じて行けば、歸着する所には歸着する、歸着しない人があつた所が害にはならぬ。却て自分の思想を愈々磨いて行く上に於ても少しも妨害にはならぬと私は考へて居ります。兎に角此ソーシアル・デモクラシーは矢張り本當のデモクラシーでない。即ち私が向後日本に起つて呉れなければならぬ、吾々が自ら

其一員となつて日本に大に起さなければならぬと思ふ所の其デモクラシーでは全然ありません。何となれば其は第四階級と云ふ多數の人間は含んで居るが國民の全體ではありません。而して其一部の者が非常なる憎しみ、非常なる敵愾心を以て、他の階級と戰爭をすると云ふのですから、是は斷じて望む可きでない。それは眞正なる平和を得る所以でもなし、眞に生存の確立を保證し得る所以でもないと私は信じて居る。否、獨露に於ても必ず左樣であると信じます。私の考へて居る眞正なるデモクラシーと云ふのは前申す通りに、國民の總ての者が人として恥かしからぬ生活をし得るやうにする、然うする上に於ての障害物を取除けると云ふことであります。其障害物は何かと言ふと、それは政治の上には無い、それは社會の上にも無いと云ふことを言ひたい。然らば那邊にあるか、それは經濟生活の上にある、私は經經學を專門にして居るから、我田に水を引くと云ふ評を受けるかも知れませぬ、其評は甘んじで受けます、私は確にさう信じて居ります。吾々の生活の第一着手は經濟生活、經濟生活が立たなければ他の生活は始ま

らない。人として有ゆる行動を始めやうと云ふ一番初めの經濟生活に大なる妨害があつて吾々の前途を妨げて居る間は眞のデモクラシーは起らない。吾々の考へるデモクラシーは之を取去ると云ふことである。而してそれを取去ると云ふことはどうするかと云ふことは、今晩はお話は致しませぬが、之を取去ると云ふ爲にあたり八方がぐら〳〵動くと云ふのでは躊躇しなければならぬ。卽ち此吾々の國民生活の不可侵、保證と云ふことを確立すると云ふことが、日本の國本を動かすことであるならば、吾々は端的に之を要求することは出來ない、我慢しなくてはならぬ、吾々に取つては日本人であると云ふことが與へられたる事實です。日本人であれば君主國の內に住んで居ると云ふことは不可動の事實である、之れを動かして吾々は眼の前に横はつて居る妨害物を取除くことは出來ない。所が私の堅く信ずる所に依れば此除けると云ふことは少しも日本の國本を動かすことにはならぬ。日本の國本をより强く、より盛んに、より清くする所以であると信じます。單り國內に於て國本が確立し國本が鞏固になるのみならず、外國に對し

て日本の國本を發揚することが出來ると私は信じて居るのであります。然らば此目的を達するには、如何なることを爲す可きかに就ては、向後機會ある毎に、卑見を開陳して行く所存であります。本論は其等に對する一の緒論として、御覽を願ひ度いのであります。

黎明錄　終

人名索引

—〔ア〕—

アスキス (Asquith) 159
アドラー (フリードリヒ) (Adler, Friedrich) 203
姉崎正治 103, 222, 414, 839. ——の議論 113-5
天野爲之 926
アリストテレース (Aristoteles) 147. ——の國家三分法 1020

—〔イ, キ〕—

今井嘉幸 1034
犬養毅 178, 346
井上學之助 470

—〔ウ〕—

ウキルソン (Wilson, Woodrow) 106-9, 204, 210, 346, 410. ——の教書 158. ——の宣言と日本 414-6
ヴエーンチヒ (Waentig) 834
內田康哉 251, 468
ウセリンクス (Usselincx) 125, 127

〔エ〕

エヂウオース (Edgeworth) 702
エベルト (Ebert) 328
エニアス (Aennius) 136
エリザベス (Elisabeth) 858
エンゲルス (Engels) 195

—〔オ, ヲ〕—

オースチン (Austin) 119
オーウエン (ロバート) (Owen, Robert) 868
大隈重信 818
大木遠吉 950
尾崎行雄 110, 261, 864, 930
オストロゴルスキー (Ostrogorski) 800
小野塚喜平次 161
オルデンバルネフェルド (Oldenbarneveldt) 126

—〔カ〕—

カーコデー (Kircaldy) 911
カーライル (Carlyle) 568 ——『君主論』 119
カーネギー平和奬勵財團 125

カイゼル 177, 198, 204, 238, 327
桂内閣 850
カテル (Catel) 107, 418
加藤高明 227, 242
金井延 868
鎌田榮吉 868
カルテンボルン (Kaltenborn) 132
河上肇 704, 839, 870
カント (Kant) 28, 106, 117, 121, 139-40, 870

—〔キ〕—

氣賀勘重 331,959
基督 14

—〔グ〕—

グラハム (ウイリアム) (Graham William) 118
グラツドストーン (Gladstone) 19, 169, 1043
グリーン (Green) 106
グレー (エドワード) (Grey, Edward) 304, 348-9, 1046
グロート (Grote) 137
グローシアス (ユーゴー) (Grotius, Hugo) 103, 115, 129. ——の著書 167. ——の國家論 141. ——『海の自由』 104. ——の思想 124-34. ——『戰爭と平和』 131 ——とホツブスの自然法論 135-40. ——の著書を有名ならしめた原因 132
黑岩周六 494

—〔ケ〕—

ケネー (フランツア) (Quesnay, François) 169
ケムプエル (Kämpfer) 『鎖國論』 63

—〔コ〕—

河野廣中 840, 854
ゴドウキン (Godwin) 874

—〔サ〕—

ザイデル (Seidel) 236
堺利彦 254, 490
阪谷芳郎 379

—〔シ〕—

シーリー (Seeley) 105
澁澤榮一 320
シヤイデマン (Scheidemann) 939
シュモラー (Schmoller) 237
シュヴァイツアー (Schweitzer) 946
シュミツト (カスパー) (Schmidt, caspar) (通稱スチルナー) (Stirner) 868
勝田主計 846

—〔ス〕—

スアレヅ (Suarez) 123
鈴木文治 878
鈴木梅四郎 267
スペンサー (Spencer) 『進化論』 29
スマイルス (Smiles) 185
スミス (アダム) (Smith, Adam) 19-20, 24, 28, 65, 91, 828. ——『國家論』 132
スローン (Sloane) 442

—〔セ〕—

セルデン (Selden) 342. ——『封鎖海論』 (mare clausum) 973

—〔ソ〕—

ソレル (Sorel) 876-7
ゾムバルト (Sombart) 13, 35. ——『英雄と町人』 26, 63. ——『何故に米國に社會主義存せざるや』 877

—〔タ〕—

高橋是清 846
高橋作衛 110, 811
高島素之 245
武富時敏 538
ダナ (Dana) 418
田中萃一郎 1042
タムソン (Thompson) 874
ダンニング (Dunning) 132, 139, 143. ——『ルーテルよりモンテスキューに至る政治學說史』 119

—〔チ〕—

チヤンバーレン (Chamberlain) 198, 557, 593
チューネン (Thünen) 『孤立國論』 62

—〔ツ〕—

津村秀松 165, 449

—〔テ〕—

デフオー (ダニエル) (Defoe, Daniel) 『ロビンソン・クルーソー』 67
寺内正毅 110, 259, 811

—〔ト〕—

德富蘇峰 29
トロツキー (Trotzky) 209, 237, 244, 252

—〔ナ〕—

ナウマン (フリードリヒ) (Naumann, Friedrich) 237 ——『中

『歌論』 84
仲小路廉 853
永田秀次郎 498
ナポレオン (Napoleon) 336, 491
ナポレオン三世 555

—〔ニ〕—

ニーチエ (Nietzsche) 38
二階堂保則 572
ニコルソン (Nicholson) 686, 825, 911

—〔ノ〕—

ノースクリッフ (Northcliffe) 1050

—〔ハ〕—

バークレー (Berkeley) 123, 157
バーク (Burke) の政治論 119
パーマーストーン (Palmerstone) 351, 1047
ハクスレー (Huxley) 156
パシフキコ (ドン) (Pacifico, Don) 352
ハスキソン (Huskisson) 19, 169
花井卓蔵『自救權』 262
林毅陸 785. ——『講和の基礎問題』 341
原敬 228, 242
原内閣 853
バルバイラック (Barbeyrac) 133

—〔ヒ〕—

ピール (サー・ロバート) (Peel, Sir Robert) 19, 169, 351
ピグー (Pigou)『Wealth and welfare』 74 ——『戰爭の經濟及財政』 68
ビスマーク (Bismarck) 9-10, 943, 983
ピット (Pitt) 19, 169
平田篤胤 1038
ヒューエル (Whewell) 133-4
ヒューム (デヴキッド) (Hume, David) 28, 121, 157

—〔フ〕—

ブートルー (エミール) (Boutroux, Emil)『哲學と戰爭』 287, 974
フーヴアー (Hoover) 859
フィッギス (Figgis)『ゲルソンよりグローシアスに至る政治思想の研究』 155
フィッシヤー (Fisher) 846, 910
フォッシユ (Foch) 231, 246, 268, 933
福澤諭吉 185
ブルジオア (レオン) Bourgeois, Léon) 815
プルドーン (Proudhon) 874
ブルンチュリ (Bluntschli) 122.

ブレー (Bray) 874
ブレンタノ (Brentano) 88. 237, 992. ——『商業戰の狂愚』(Der Wahnsinn der Handelsfeindseligkeit) 78
プレヒアノフ (Plechanow) 253. 1041

—〔ヘ〕—

ベーアド (チヤーレス) (Baird, Charles) 107, 418
ベーコン (Bacon) 27, 61
ベーベル (Bebel) 947
ヘルトリング (Hertling) 162, 205
ベルンシュタイン (Bernstein) 876
ベンタム (Bentham) 28, 104, 118 ——功利說の概概 137
ヘンダーソン (Henderson) 204

—〔ホ〕—

ホール (Hall) 874
ボーダン (Bodin) 123
穂積陳重 873
ホッヂスキン (Hodgskin) 874
ホッブス (Hobbes) 103, 115 ——の著書 167 ——の徹底的主權論 151 ——の國家論 146-50 ——全集 135 ——『レヴイアサン』 120, 134
堀江歸一 896
ホレース (Horace) 136
ボン (モーリッ) (Bonn, Moritz) 375
本庄榮治郎『德川時代の米價政策』 831

—〔マ〕—

マーシアル (Marshall) 68
牧野英一 263
マキァヴェリ (ニコロ) (Macchiavelli, Niccolò) 122 ——の國家二分法 1022
マコーレー (Macaulay) 61
マサリック (Massaryk) 253, 296
マックス (Max) 249
マルクス (Marx) 209, 297, 355, 874

—〔ミ〕—

三井甲之 224
ミューアヘッド (Muirhead)『獨逸哲學と戰爭』 1011
ミル (ジエームス) (Mill, James) 137
ミル (ジョン・スチュアート) (Mill, John Stuart) 721

—〔ム〕—

武者小路公共 204
室伏高信 213, 244, 375

—〔メ〕—

メンガー（アントン）(Menger, Anton) 874

—〔モ〕—

モール（ロバート・フオン）(Mohl, Robert von) 122
モールスウォース (Molesworth) 135, 137
本居宣長 1038
モンテスキュー (Montesquieu) 192

—〔ヤ〕—

山崎覺次郎 850 ——『貨幣銀行問題一班』 916
山本達雄 538, 857

—〔ヨ〕—

横井時敬 843
吉野作造 112, 158, 213, 298, 931, 967

—〔ラ〕—

ラサルレ（フェルヂナンド）Lassalle, Ferdinand) 297, 942-4
ラシュダール (Rashdall) 117
ラスキン (Ruskin) 568

—〔リ〕—

リーブクネヒト(Liebknecht) 254, 328, 939, 947

—〔ル〕—

ルーソー (Rousseau) 28, 121 ——の社會契約說 152
ルーズベルト (Roosevelt) 1043

—〔レ〕—

レーントゲン (Röntgen) 239
レッキー (Lecky) 105
レニン (Lenin) 209, 252
レンナー (Renner) 203

—〔ロ〕—

ロイド・ヂョーヂ (Lloyd-George) 160, 410, 574, 933
ロック（ジョン）(Locke, John) 28, 121

—〔ワ〕—

若槻禮次郎 896
ワグナー (Wagner) 237
和田豐治 959

件名索引

—〔ア〕—

阿片燒却 353
亞米利加と日本 397
アリストクラシー 153
アルサス・ローレン 211
アングロサキソン文明 795

—〔イ〕—

英吉利 13-16, 43, 169, 208, 281, 317. ——人 23, 31. ——の二大政黨政治 30. ——國防條例 39. ——の所得稅制度 170. ——と獨逸との相違の點 655. ——の東印度會社. 126. ——經濟政策の破綻 695. ——金融市場の變調 611-34. ——財政の大黑柱. 170. ——の功利哲學 60. 一世紀前の——財政經濟狀態 6. ——兌換券の兌換停止 7. ——的經濟思想 89-98
一婦一夫婚 872
イムペリウム 1021
英蘭銀行 600
印度證券賣出の制限 515
インフレーション 728-31

—〔エ〕—

英獨 ——經濟戰 18. ——經濟上の前途 16-20. ——經濟對抗の前途 5. ——財政經濟上の根抵 6. ——經濟政策 6.

—〔オ, ヲ〕—

オートクラシー 160, 259
歐洲 ——出兵 412. ——戰時經濟論 4. 『——大陸法制史叢書』(Continental Legal History Series) 120
『己の欲せざる所は人に施すな』 148
オプション 511
和蘭 7, 27, 40, 125. ——東印度會社 126
オリガキー・テラニー 154

—〔カ〕—

海上權 45
海關稅 172
海賊主義 (Navalism) 369, 1048
海外投資 927

戒告 831-3
階級戰爭 1058
價格騰貴 894
革命 ——鼓吹論 144. ——の侵略 255
ガスト・フロインドリヒ・カイト 187
株式會社 359
神の旨 145
爲替 ——の裁定 508. ——手形 604. ——相場の立方 508, 627. 參着—— 607. 英米——相場 631-4

—〔キ〕—

キアピタル・マグネート (資本閥) 736
議院政治 730
極窮權 (Right of extreme need) 263, 836. ——極窮點 (Point of extreme need) 837. ——緊急權 263
基督教 37
ギルド 828
金禍 270
金貨本位 513-7

—〔ク〕—

空想的世界觀 111
クラインシュターテライ (Kleinstaaterei) 180
クラインシュテッテライ (Kleintädterei) 180
クライニヒカイツクレーメライ (Kleinigkeitskrämerei) 181
貨幣 893. ——調節 846, 892, 917-8. ——經濟 838. ——經濟時代 90. ——價値 60, 74. ——價値と富 65
課稅 726
『願望は思想の父』 312
官僚主義 56
官權主義 18
軍國主義 88, 93, 198. 武斷的—— 319. ——の起りし所以 975. 經濟的—— 315
軍事費の內容 644-8

—〔ケ〕—

經濟 ——の原則 94. ——會議 304. ——政策 19. 軍國—— 711. 平時—— 19. 金の—— 66, 89, 704. 物の—— 704. ——會議の決議 379. 自足—— 13, 75
ゲルド・リベラリズム 61
憲法政治 60
減食令 17
現金輸送點 608
言論思想 501. ——の壓迫 416-22

—〔コ〕—

コールローン 537
交戰國 ——戰費一覽表 642. ——戰死數 645. ——の出征兵數 644. ——の負傷兵數 646.
講和問題 863
講和談判と英佛の主張 280-3
公債 ——の應募 728. ——の償却 175
コヴナント(約束) 149
合理主義 60
功利主義 60
黃禍(エロー・ペリル) 981
『工場封建主義』 952
穀類收用令 839
國民勤儉野戰 (National economic campaign) 582
國際聯盟 304-6
『國際貿易は輸入の利益の爲に行はるゝものなり』 528
御朱印船 359
『國旗は貿易に從ふ』 360
コムメンダ 359
コンチンゲンチールング (Kontingentierung) 173
コムマーシアリズム 31
今日の法律 262. ——の教育 793

—〔サ〕—

在外 ——正貨 519, 923. ——債權 536
在外債權 536
最高價格制定論 822-3
財政々策の二大支柱 43
『最大多數の最大幸福說』 28
三位一體の神 105

—〔シ〕—

自給策 99
士魂商才 23
自主權 455
自主的 458-63. ——出兵 463-8
自然法 143, 145, 148. 純正—— 143. 特有—— 143
思想統一 1011
支那 81
資本 541, 721. ——の輸出 363. ——主義 366. 流通—— 544. 固定—— 543. 輸出——主義 355
資本的侵略主義 283, 315, 368. 日本と—— 979-82. ——の害毒 283-4. ——の反對毒 287-9. ——の根據 361
私法 791
社會 ——契約 142, 151. ——問題の解決 64. ——黨 202. ——黨禁壓法 984. 各國——

黨の員數 203. ——の制度 787 ——民主黨 177, 279
社會主義 32. 自治體——(Municipal Socialism) 866. 學問上の—— 871-2. 英米の——と歐洲大陸の—— 866. 官僚—— 14. 議院—— 881
社會政策 791, 880. ——と社會主義 955. ——學會 941. ——學會成立の理由 941. ——の定義 949
社會民主々義 32, 284, 315. ——の危險 307. ——と資本的侵略主義 977
シャーデン・フロイデとアイゲンジン 183
借款 365
重商主義 22-5
自由 ——鑄造 637. ——主義 39. ——貿易論 79. ——貿易主義 63, 80. ——貿易學說の根據 555. 『——海論』の內容 125
純正政治學說 120
商人 ——主義 26. ——根性 32. ——商魂商才 23. ——商賣忌み敵 41. ——新町人主義 42. ——素町人世紀 41. ——素町人主義 29, 37
商業 ——權力政策 20. ——は平和の戰爭 452. ——商品輸出と資本輸出の別 738. ——『正直は最上の商略なり』 26
食料 ——問題 53. ——品騰貴の割合(開戰以來) 16
植民政策 89
小國 ——の保善保護 399. ——根性と小都會根性 179
諸式高直 894
身體財產の不可侵 1054
信用 518
人類のみが社會を作る理由 150

—〔ス〕—

瑞西新民法 873
スタトゥス・クオ 370
ステーチスト誌 215-22
ストックホルム社會黨大會 202
スパルタクス 1041
西班牙 24, 125

—〔セ〕—

制海權 347
政體 154
『政治は人文の一切にあらず』 271
政黨政治は勢なり 798
世界 ——戰爭 12. 『——大法律學者列傳』 121. ——經濟戰論の重なる根據 314-8

生產組合 943
塞爾比亞 34
戰後 ——の戰爭 308. ——の世界文明 59. ——の歐洲文明 60. ——經濟界の重大問題 742. ——經濟の根本的問題 767. ——の經濟界に於て眞に恐るべき事は何 725-6
戰時 ——經濟 19, 66. ——貯蓄證券 679. ——經濟の特色 714. ——貸付金庫條例 674. ——貸付金庫證券 (Kriegsdarlehenskassenschein) 675. ——關係經濟財政書類の展覽會 77
戰爭の起る二大原因 305
戰費 ——の意味 750. ——取立方法 726. ——負擔の分け方 649. 實際の—— 754. ——支出總額(開戰後三年間各國の) 423
專制政治論 138
專制政府維持論 144

—〔ソ〕—

ソヂアル・ポリチック 940-1
ソリダリテー・ソシアール 815, 950

—〔タ〕—

ダーダネルス海峽 43
大戰 ——の犧牲 301. ——の主なる原因 706
第三階級の哲學 30
第三次的掠奪 (tertiary exploitation) 354
第十九世紀 ——の思想 38. ——各國財政改革 11
兌換 ——停止 46. ——券發行 849. ——券發行制度 849. ——券膨脹防止の三作用 850-1
ダムピング (Dumping) 207, 291, 448-9, 739
ダルレーンス・カツセ 698
單一稅論 169

—〔チ〕—

中央經濟同盟 197
中歐關稅同盟 79

—〔ツ〕—

通貨 ——の膨脹 650. ——膨脹の原因 915. ——の調節 687, 860. ——證券流通高と物價指數表 684. ——總額兌換券流通高と東京市外五市の組合銀行預金高對照表 905
帝國主義 593
デモクラシー (Democracy) 111, 153, 160, 226, 259, 1020 ——

の定義 937. ——の語源 1020. 新らしき意味の—— 496. インダストリアル—— 816. 眞正の—— 261, 815. ソーシアル—— 271, 323, 485, 938, 954. 舊き—— 813. プロレタリアン—— 816. シュード——(假面的民主々義) 261
デフエンス・オブ・ゼ・レルム・アクト 4

—〔ト〕—

獨逸 12-16, 235, 238, 577. ——の人口 55. ——の國民 9, 173. ——革命 251-2, 279. ——の財政 50, 168. ——の屈服 205-7. ——の二重財政 9, 18. ——關稅の重課 9. ——關稅政策 10. ——保護政策 9. ——食料難 3. ——の增稅方法 11. ——聯邦制度 12. ——の公債募集 51, ——の軍國主義 57. ——の經濟力 69. ——の月賦革命 209-10. ——の潛水艇戰 94. ——國家の弱點 168. ——戰事公債 176, 669. ——協會學校 223. ——の海軍擴張 286. ——戰時公債應募人員 769. ——戰敗の原因 936-7. ——の直接稅 168. ——間接稅 168. ——勞働協會 942-3, ——戰後財政狀態 8. ——軍事公債募集成績比較表 70-1. ——人を一皮剝いで見ろ 187.
獨墺關稅同盟 84
『時は金なり』 26
獨裁政治 153
富の分配の變動 768
トレード・ユニオニズム 882

—〔ナ〕—

南阿戰爭 353

—〔ニ〕—

西インド會社 127
日米戰爭 477
日英同盟 14, 33-4, 40, 61
日英米物價騰貴の狀態比較表 903
日支親善 402
日本 231-5. ——の地位 81. ——の對內問題 857-62, ——と獨逸の軍隊 92. ——の使命 212, 500. ——の經濟的利權 391-4. ——が戰ふ 405-9 ——銀行兌換券流通高と五十六品平均物價指數表 685. ——銀行兌換券發行高と東京市外八市の物價指數對照表 904.

——の憲法 829. ——の國本 1037. ——の兌換制度 916. ——の死亡率 571. ——物價騰貴の根本原因 734
忍辱的求和 256

—〔ハ〕—

拜金的利己主義 61
パシリコン 1021
巴里經濟會議 77
ハンザ商人 552
反對毒 283

—〔フ〕—

フィデール 189
フキジオクラット(重農主義)の學說 169
物價 ——指數(サウエルベック式)比較 95. ——騰貴率 96. ——騰貴の原因 97, 686, 900 ——騰貴の打擊 731. ——調節令 819 ——調査會 826. ——調節 886-90. ——の比較 895. ——騰貴の趨勢 908. 『——騰貴と其抑制方策』の內容 897. ——指數總平均に對して米價の比較表 841
プッフフイヒカイト (Pfiffigkeit) 191
佛蘭西 7, 25, 169, 265. ——人 25. ——文明 335. ——の勝利 324. ——の使命 258.
プラグマチズム 63, 117
プルターク 142
プルートクラシー 777
ブレスト・リトウスク條約 206
プロイセン 171
プロレタリアン 486. ——階級 790
文化價値 60
分配の問題 767
文明的武士道 257

—〔ヘ〕—

米國 ——の參戰 98, 430. ——禁輸問題 86
平準點 607
平和 永遠の—— 138. 如何なる高價にても—— 249
米穀取引所 834
米穀官營論 861, 887
米價調節 891
白耳義 34

—〔ホ〕—

ホーヘンツオルレン家 211, 557
封建制度 12
法治國 358
貿易は國旗に從ふ 358, 557
暴利取締令 824

亡國論 888
法典出來て法學亡ぶ 1013
保護 ——政策 78. ——主義 172
ポリチコン 1021
ポルトガル 125
ボルシエヴキズム 272, 1040
ボンノミー 189

—〔マ〕—

マルクス主義 62
マンチェスター學派 554

—〔ミ〕—

ミリテア・レヂメント（武斷政治） 329
民本主義 340
民族自決主義 347

—〔ム〕—

無條件降服 293
無政府主義 1010
無賠償無併合 348, 436

—〔メ〕—

メチウエン條約主義 94
メルカンチル・システム 65

—〔モ〕—

モナルキア 1022
モナルキー (Monarchy) 153

—〔ヤ〕—

約束手形 598

—〔ユ〕—

ユーチリテー 136
ユーチリタリアニズム 117. ——の起原 118
輸出 ——奬勵 101. ——超過 520
猶太人 552
輸入超過 533

—〔ヨ〕—

歐羅巴 ——の憲法 828. ——の大戰 110

—〔リ〕—

利益範圍 347
流通證券（カーレンシー・ノーツ） 43, 687

—〔レ〕—

勞働 ——運動 989. ——運動の目的 997-8, 1014
『レヴィアサン』 152
レプブリカ 1021-2

—〔ロ〕—

ローマ人 153. ——法王 128

ロイド・ヂョーヂズム 494
勞働 ——階級 64. ——の鐵則 943. 人間の—— 89, ——黨の成立は勢なり 802. 既存政黨と——階級 800
露西亞 34. ——革命 209.
ロムバート・ストリート 68, 93, 507, 597-610
倫敦 508-19

大正八年六月二十八日印刷
大正八年七月一日發行
大正八年十一月五日八版發行
大正九年五月十一日廉刷初版發行

黎明錄
廉刷特價金參圓四拾錢

著作者　福田德三
東京府豐多摩郡中野町本郷百一番地

發行者　面家莊佶
東京市京橋區桶町十五番地

印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

著作權所有

發行所　東京市京橋區桶町十五番地
株式會社大鐙閣
電話京橋一一一三番
四三一一番
振替口座東京三三六一八番

362
122

終